被造物管理の神学講演10（A－10）

2014 年 5 月 7 日
大野キリスト教会献堂記念講演（3）

A. 自然

10. 聖書の正しい理解を求めて

（聖書が神の言葉であるとはどういう意味か）

はじめに

本日は、新会堂の献堂記念講演の 3 回目にご出席いただき、心より感謝する。
このシリーズにおいて、一回目は、創世記 1 章から「世界創造の記録」について解説した。二回目は、聖書全体から「宇宙創造の奥義」を模索した。そして本日の三回目は、「聖書の正しい理解」について話させていただきたい。

この講演シリーズでは、これまで知られていない情報をたくさん紹介している。しかも、既成の思考パターンにとらわれず、新しいパースペクティブの基で展開させている。むろん、大勢の方々の助けをいただき、たくさんの書物を参考にした。だが、あえて注を一切付けず、参考文献も挙げていない。自分の言葉と論理で、全責任を負う覚悟で話している。神学は、キリストへの信仰と、教会的な背景をもつ教理を土台にしながら、個人の問題意識と生活体験の中から出発し、その個人に帰属するものである。その意味では、被造物管理の神学は、その頭に固有名詞がつく。つまりこの講演原稿は、「中澤啓介の被造物管理の神学」なのである。そして、講演会の参加者の皆さんには、ぜひ自分の名前の付いた被造物管理の神学を構築していただきたい。

この講演会は、前半と後半のスケジュールを変えている。前半では、私が本講演原稿の重要なポイントをまとめて、講義する。後半では、参加者によって講演に対する質疑応答、批判、反論、検証作業を自由にしていただく。そこでは、ご自分の考えをご自分の言葉で述べていただきたい。遠慮なく中澤神学を斬り、ディベイトしてほしい。そうすることによってはじめて、参加者は、自分の名前の被造物管理の神学を築きあげることができる。そのためには、自由闊達な雰囲気と健全な批判精神が不可欠である。

Ⅰ. 被造物管理の神学における聖書の位置

最近私は、どこに行っても、「現代の教会は、パラダイムシフトが必要である」と講演している。キリスト教界は、信仰義認による天国行きの信仰から、神の国に生きる信仰へとシフトする必要がある。また、教派を絶対化する教義から、エキュメニズム志向の教義へと変わらねばならない。さらに、聖俗二元論に基づく伝統的神学から、回復された人間性に基づく被造物管理の神学へと、転換が求められている。

神はキリスト者に、この被造物管理の神学に生きることを求めている。しかも、この神学に立たない限り、キリスト教界の未来はない。このような福音理解でなければ、「欠陥福音」だと言わねばならない。では、この新しい被造物管理の神学において、聖書はどのような位置を占めるのか、ご一緒に考えてみたいと思う。

1. 聖書が神学の中心にあるとはどういう意味か

これまでのキリスト教神学は、聖書を中心に、神論、キリスト論、聖霊論、贖罪論、教会論、終末論と展開するのが普通である。それに対し、新しい被造物管理の神学は、同じように聖書を中心に置きながら、自然論、社会論、人間論、啓示論、贖罪論、神の国論、教会論、終末論などを扱う。パラダイムが変われば、展開される各論部分

が異なるのは当然である。ただし、いずれの神学においても、「聖書」が中心に置かれることに変わりはない。

神学は、どのようにパラダイムシフトをしても、やはり神学である。神学である限り、テーマの如何にかかわらず、最終的には、聖書がそのテーマについて述べていることをもって終結する。それが、哲学や宗教学とは異なる点である。
聖書は、従来の神学でも新しい神学でも、神学の中心に置かれている。ところが、聖書が果たす役割になると、両者の間に大きな違いがある。前者では、聖書は、神学の各論を上から支配している。後者では、聖書は、神学の各論を下から支えている。

もう少し分かりやすく説明しよう。これまでのプロテスタントの、特に福音派の組織神学は、大抵聖書論から始まる。そこでは、「神学の序論（プロレゴメナ）」として、聖書の本性、権威、正典性などの問題が扱われる。このように聖書論が神学各論の前に置かれるのは、これから展開される各論の内容と方向性が、聖書自身によって規定されるからである。実際に、その各論は、聖書の言葉で満ちたものになる。

ところが、新しいパラダイムの神学は、聖書論から始めなかった。最初の七回までの講演は宇宙の話ばかりで、聖書の引用をほとんどしなかった。聖書を中心にするはずの神学講演で、なぜ聖書を使わず、宇宙に関する科学的な情報提供ばかりをしたのか。
それは、神学に対する考え方を、根底から変えたからである。被造物管理の神学では、どのようなテーマを扱っても、まずそのテーマに関する最新の学問的成果を学ぶことからスタートする。その上で、そのテーマに対する神の御心を知るため、聖書に向かう。えっ、学問的成果を踏まえてから聖書に向かう？　それはないでしょ。神学は神の御心を伺う学問だ。その神の御心は、聖書に啓示されている。とすれば、まず聖書を開くべきではないのか。それなのになぜ、最初に学問的成果に聞くのか・・・。順序が逆転している、そう考えるキリスト者がいても、当然である。教会はこれまで、ずっとそのように考えてきたのだから。

しかし、この新しい神学で順序を逆転させたのは、二つの理由から適切である。一つは、神学で扱いたいテーマが、必ずしも聖書に出てくるとは限らないからである。もしそのテーマが、聖書の完結以前から存在した場合には、聖書がそのテーマにふれる可能性はある。もしそうであれば、取り上げることもできよう。ところが、我々が神の御心を伺いたいと願っているテーマのほとんどは、聖書の時代にはなかった。従って、聖書には出てこない。それゆえ、聖書に出てこないとしても、神がそのテーマについて何の関心もない、とはいえない。あるいは神学のテーマとしてはふさわしくない、などと考えてもいけない。聖書が一言もふれていないことでも、神学が扱わねばならないことは山ほどある。

二番目の理由は、聖書がたとえ似たような出来事を報じていても、その状況や背景は違い過ぎることである。ほとんどの場合、その出来事をそのまま、我々のテーマに関連づけることはできない。どのように関連づけるかは、取り上げているテーマの中身をよく理解している必要がある。むろん、関連する聖書箇所もすべて取り上げねばならない。我々の問題意識とそれにぴったり当てはまる聖書箇所、この二つを巧みに組み合わせ、一貫した体系につくりあげないかぎり、その問題に関する神の意思を把握したことにならない。

ところが教会は、長い間全く違う考え方で、伝統的な神学を構築してきた。まず教会は、歴史の流れの中で、神、キリスト、聖霊、救い、教会、終末など、キリスト教信仰にとって中心的な教理を、信仰告白として打ち立てた。そして教会は、これらの教理に関連する聖句を聖書からすべて探し出し、それらの聖句を演繹的に展開し、告白してきた教理を擁護した。これが伝統的な神学の方法論だった。そこには、聖書から信仰告白をつくり、その信仰告白を聖書によって立証するという、循環論法がある。そのような神学は、キリスト教村社会では通じる。だが、聖書の権威を認めない部外者にとっては、独白の世界に過ぎない。

例えば、「宇宙の創造」というテーマを取り上げてみよう。聖書はその冒頭において「神が天と地を創造された」と述べている。そこで教会は、「神は宇宙の創造者である」という教理を打ち立てる。続いて、この教理に関連しそうな聖書箇所をすべて集める。そして、それらの聖句を並べ替え、一つの体系につくりあげる。キリスト者は、その体系化された創造の教理を眺め、創造を理解した気分になる。そこには、実際の宇宙を実験・観察するなどという余地は全くない。その必要も感じない。これが、伝統的なキリスト教神学の「創造論」だったのである。

2. 被造物管理の神学は、すべての問題を扱う

被造物管理の神学は、伝統的な神学とは違った方法論を提唱する。キリスト者は、キリストと共にすべての被造物を管理する。日常生活は、被造物管理のわざそのものである。そのわざには、仕事、余暇、スポーツ、読書、散策、芸術、音楽、観劇、文化活動、趣味、ショッピング、旅行、学問、テレビを見ること、友人との団欒、病気、経済、社会、政治、民族や国際関係、天候、自然災害、被造物の全歴史など、すべてのことが含まれる。そこには、聖なる世界と俗なる世界の区別はない。

もう一度、従来のキリスト教神学の各論を見ていただきたい。神論、キリスト論、聖霊論、贖罪論、教会論、終末論などである。いずれも、神と深い関わりがある。まさに、聖なる世界の話である。では、新しい被造物管理の神学の各論はどうか。少なくとも自然論、社会論、人間論の三つは、聖なる世界とはいえない。啓示論、贖罪論、神の国論、教会論、終末論などは、神と深い関わりがある。しかしそのようなテーマであっても、被造物の管理という観点から扱う。従って、純粋に聖なる世界の出来事にはならない。

神は、人間の聖なる世界に対する関わりにのみ、関心をもっているわけではない。それは、旧約聖書においても、新約聖書においても、変わらない。例えば、神がイスラエルの民に与えた十戒の、最初の四つは神に対するものであり、残りの六つは人に対するものだった(出エジプト 20:1-17)。レビ記の「律法」には、宗教行事に関わる「祭儀法」と、日常の諸問題に対処する「市民法」とが含まれていた。箴言は、「あなたの行くところすべてにおいて主を認めよ」(3:5-6)と教えている。その格言のほとんどは、日常生活に関わるものばかりである。伝道者の書は、神が、人の喜怒哀楽のすべてに時を定めていることを、明らかにしている(3:1-13)。

新約聖書のキリスト者の歩みについても同じである。イエスは神の国を説かれ、その御国の倫理を明らかにした。その最たるものは山上の説教だった(マタイ 5-7 章)。その教えの一つ一つは、日常生活に深く根ざしたものばかりである。「信仰や霊的な世界」と「世俗や物質的な世界」の区別など、一切なかった。そういう区別は、後のギリシャ哲学やグノーシス主義の産物である。2 世紀から 3 世紀の初期キリスト教神学は、そのような哲学の影響を色濃く受けて発展した。

パウロは、日常的な事柄を信仰から切り離すことはしなかった。「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい」(Ⅰコリント 10:31)とか、「あなたがたのすることは、ことばによると行ないによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい」(コロサイ 3:17)、「何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい」(コロサイ 3:23)と教えている。霊的な世界を物質的な世界から区別せず、両者とも、神に属していると考えていたからである。「地とそれに満ちているものは、主のものだからです」(Ⅰコリント 10:26)。「食物は、信仰があり、真理を知っている人が感謝して受けるようにと、神が造られた物です。神が造られた物はみな良い物で、感謝して受けるとき、捨てるべき物は何一つありません」(Ⅰテモテ 4:3-4)。

キリスト者は、日常のどんな小さな事柄であっても、神の御心を求めながら歩んでいる。いつでも、どこでも、神の栄光が現されることを祈りつつ生活している。それゆえ、被造物管理の神学では、人の営むすべての活動が、神学のテーマになる。

3. 被造物管理の神学は、理解力や識別力を働かせる

被造物管理の神学の根幹は、「キリスト者はキリストと共に被造物を管理する」という使命にある。この使命を担うキリスト者は、どのような管理にたずさわるにしても、その管理業務に関する神の御心を知り、使命を全うしたいと願っている。しかし、具体的な事柄に対する神の御心は、聖書に記されているわけではない。基本的原則さえ、聖書の中に見出すことは困難である。聖書は、そのような目的のために記されたわけではないからである。キリスト者はむしろ、与えらえている理性(この理性は御霊の支配下にある)を用い、祈りの中で神の御心を求めつつ、管理のわざにたずさわる。

パウロの次の言葉を聞いていただきたい。

> 私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられます

ように。（コロサイ 1:9-10）

この箇所の「神のみこころに関する真の知識」と「神を知る知識」は並行関係にあり、同じことを述べている。この表現には、今我々が問題にしている「被造物管理にあたって必要な神の御心に関する知識」も含まれる。
パウロはまず、この知識に満たされるためには「あらゆる霊的な知恵と理解力」が必要だと説く。「霊的な知恵と理解力」とは、聖霊によって整えられた知恵や理解力のことである。「あらゆる」という言葉は、この知恵と理解力が及ぶ範囲すべてを意識して付加された。キリスト者は、託された使命を果たし得る「知恵と理解力」を、神から備えられている。神がキリスト者に、能力以上の責務を負わせるようなことはしない。
その知識は、ある時点で満たされている。しかしそれだけでなく、その後は増し加えられ続ける。そのためには、キリスト者の「主にかなった歩み」が求められる。そのような歩みは、当然主に喜ばれ、善行の実を結んでいく。

このコロサイ人への手紙に記したことを、パウロは、ピリピ人への手紙の冒頭のあいさつにおいても、言葉を変えて繰り返している。このことが、キリスト者の歩みにとって、極めて重要なことだったからである。

> 私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。またあなたがたが、キリストの日には純真で非難されるところがなく、イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となり、神の御栄えと誉れが現わされますように。（ピリピ 1:9-11）

ここでパウロは、キリスト者の中にある「真の知識」と「あらゆる識別力」に言及する。これらの能力は、「真にすぐれたものを見分けることができる」キリスト者に、変えてくれる。しかもそれは、キリスト者を「キリストの日には純真で非難されるところがない」ように、整えてもくれる。さらに、「イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となる」ように、歩ませてくれるのである。

この箇所の「真の知識」は、先のコロサイ人への手紙 1 章の「神のみこころに関する真の知識」と同じことを述べている。また「識別力」は、先の「霊的な知恵と理解力」と同義である。しかも、「善行のうちに実を結び」とか「義の実に満たされる」と、いずれの箇所においても「実」について言及している。人間にもともと与えられている「理解力とか識別力」及び「知恵とか知識」は、キリスト者の人生に豊かな実を結ばせる。そして、神の栄光を現わす者につくり変える。すばらしいことだ。ところが、伝統的な神学は、人間の全的堕落を強調するあまり、この種の能力を過小評価している。残念という他ない。

神は、自然の中には自然法則を定めた。自然は、通常その法則によって運行される。同じように神は、社会の中には社会のルールを、人間関係にはその関係を正常に保つための原則を定めた。そのことは、信仰的・霊的生活においても変わらない。神の定めた霊的原則がある。例えば、信じる者は救われる。神を第一にするなら、すべての必要は満たされる。従う者は祝福される。神は万事を益と変えてくださる。ささげる者は豊かな報いを受ける。蒔いた種を刈り取る。感情で行動すれば亀裂を生む。罪の報酬は死である。受けるよりは与える方が幸いである。小事に忠実であれば大事を任される。探す者は見出す。戸を叩くなら開かれる。祈るなら応えられる。忍耐は希望を生み出す。神は愛する者を訓練する・・・。キリスト者が日常味わっている恵みは、神によって定められた法則なのである。従って、キリスト者が信仰の歩みを続けていけばいくほど、神との交わりは深まっていく。そうなると、神の定めた霊的なルールも身につき、豊かな実を結ぶ者になっていく。

言うまでもなく、キリスト者が日々直面する問題は、単純なものばかりではない。否、小さく見えることであっても、複雑な問題がほとんどである。複雑であるというのは、そこにいくつかのルールが絡み合っている、ということである。そういう問題であればあるほど、理解力や判断力を必要とする。例えば、今日の天候を予測することは、今日の日の出時間を知ることより、はるかに難しい。地震の起こる可能性が高い地域を予測することはできる。だが、その地震がいつごろ、どの程度で起こるのかを予測することは、今のところできない。現在分かっているルールを組み合わせても、なお不確定な要素が残るからである。否、人にはまだ、未発見のルールが山ほどあるのだ。

自然の問題は、比較的単純である。社会的な問題は、よりいろいろなことを考慮しなければならない。人と、歴史と、さまざまな状況が絡んでくるからである。
先日、クリスチャン新聞の根田編集長から、メールが届いた。友人の朝岡牧師たちが、「特定秘密法案」に対する牧師たちの反対署名活動を展開している。ぜひ参加してほしい、ということだった。若い牧師たちが立ち上がっ

てくれたことが、何よりもうれしかった。そのことをまず、神に感謝した。そして、この法案に反対の署名活動に参加すべきかどう、神の御心を伺った。祈りの中で、聖霊は、署名するかどうかを決める前に、もう一度法案を読み直しなさい、と語ってくださった（信仰的にそのように確信した、という意味）。

その全文は、昨年の 12 月 8 日の朝刊、見開きの 2 頁にわたって掲載されていた。そのことを思い出し、じっくり読んだ。この法案については、それまで数週間にわたり、ずっと考え続けてきた。それでも、法案の全文を読んだことはなかった。読み直してみると、それまで気づかなかったことがたくさん見えてきた。関連する記事や情報をインターネットで調べた。各方面の有識者によるさまざまな意見をたくさん読むことができた。私の返信にどれほどの意味があり、効果（価値）があるのか、返信しないとどうなるのか、じっくり考えてみた。やっと結論が出た。そんなわけで、メールの返信にはかなりの時間を要した。

言うまでもなく、ここで皆さんに、「特定秘密法案」について考えてほしいわけではない。ただ、小さなことであっても、ものごとの判断は、決して簡単ではないことを知っていただきたかっただけである。この種の迷いや悩みは、誰もが、日々経験している。身の回りに起こる日常的な出来事に対する神の御心は、霊的な知恵とか理解力、判断力などをフルに活用して見出していく以外にないのである。

4. 被造物管理の神学は祈りと御霊の働きを大切にする

被造物管理の神学に生きると、キリスト者生活に二つの点で大きな変化が生じる。一つは祈りであり、もう一つは御霊の導きである。被造物の管理などというと、仰々しく聞こえる。しかし、分かりやすく言えば、私の身の回りに起こるすべてのことは、復活されたキリストのご支配のもとで起こっている。私は、それらの一つ一つに、キリストと共に管理する（仕える）責任を委ねられている。祈りを通し、聖霊の助けによってその使命を果たしていく、そういう生き方のことである。

神は、この使命遂行のために、祈る恵みを備え、御霊の助けを送ってくださった。このすばらしい賜物が無ければ、被造物管理などおこがましく、全く不可能なことである。それは本来、神にのみ属すことだった。神は最高級のわざを、キリストによって贖った者たちと共に分かち合おう、と計画された（ローマ 8:15-17）。従ってキリスト者は、神の御霊の助けがあってはじめて、その使命を遂行できるのだ。

最後の晩餐の時イエスは、御父の大切な約束を明らかにした。キリスト者に聖霊を遣わすとの約束である。

> しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。（ヨハネ 14:27）
> わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。（ヨハネ 15:26）
> わたしは助け主をあなたがたのところに遣わします。その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。また、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。わたしには、あなたがたに話すことがまだたくさんありますが、今あなたがたはそれに耐える力がありません。しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。（ヨハネ 16:7-13）

イエスは、「真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます」と、弟子たちに教えた。教会は、この言葉の中に、聖書が記され、教会に与えられることを読み取った。むろん、そのような内容を含めても構わないだろう。だが、イエスが語られたことは、もっとずっとパーソナルなことのように思われる。真理の御霊は、今も、この世界のすべての人に、そして一人一人のキリスト者に働いている。イエスは、そのことを話されたのだ。

人間がもつ理解力や判断力、それはとてもすばらしい。だが、神が人に託された使命から言えば、それだけでは不十分だった。そのような能力は、神の御霊の御支配の中に生かされて、はじめてその使命に役立つものとなる。御霊の助けを受けない、生まれつきの能力だけでは、神の使命を果たすには、間に合わない。パウロの次の言葉を聞いていただきたい。

> この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のこと

は御霊によってわきまえるものだからです。御霊を受けている人は、すべてのことをわきまえますが、自分はだれによってもわきまえられません。（Ⅰコリント 2:13-15）

この箇所には、数多くの「御霊」の働きに関する言及がある。「御霊に教えられたことば」、「その御霊のことば」、「御霊のことを解く」、「神の御霊に属すること」、「御霊のことは御霊によってわきまえる」、「御霊を受けている人は、すべてのことをわきまえる」などである。御霊の助け、これこそがキリスト者に備えられた最大の特権である。神の御霊は、今日も一人一人のキリスト者を教え、導いておられる。キリスト者は、御霊の賜物を受けながら託された使命を果たしていく。その賜物についてパウロは、次のように述べている。

ある人には御霊によって知恵のことばが与えられ、ほかの人には同じ御霊にかなう知識のことばが与えられ、またある人には同じ御霊による信仰が与えられ、ある人には同一の御霊によって、いやしの賜物が与えられ。（Ⅰコリント 12:8-9）

キリスト者生活は、「御霊によって導かれる」（ガラテヤ 5:18）。あるいは、「御霊によって生き、御霊に導かれて、進む」（ガラテヤ 5:25）。さらには、「すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい」（エペソ 6:18）という歩みである。キリスト者の歩みにおいて、聖霊がどれほど重要であるかは、ローマ人への手紙 8 章を一読すれば明らかである。この神学講演が、単なる知的な遊びに終始せず、圧倒的なリアリティーを体感させるものとなるために、お家に帰られてから、この 8 章をじっくり読んでいただきたい。

新約聖書は、御霊の重要性を、教会とキリスト者の歩みに不可欠なものとして説いている。ところが福音派の教会は、聖書を重要視するほどには、御霊の働きを強調していない。少しでも強調しようものなら、カリスマ派になったのではないか、と騒がれたりする。それも、分からないわけではない。行き過ぎというか、逸脱した聖霊運動が教会を混乱させた、苦い歴史を味わわされたからである。

神の御霊と言いながら、自分勝手な思いつきや、いい加減なことを言うキリスト者が後を絶たない。そのために、教会は多くの被害を受けた。従って教会は、御霊が聖書と共に働くことを強調し、御霊の働きを制限した。御霊は聖書の真の著者である。それゆえ、御霊が聖書に反するようなことを示すはずはない。そのような論理で、御霊の語りかけと言われるものに対し、聖書による枠づけをしたのである。

教会史上を眺めるなら、聖書にこのようなチェック機能を課したのは、賢明なことだった。だが、それと同時に、御霊の自由な働きを、聖書によって制限し過ぎた事実も認めなければならない。危険性を重視するあまり、御霊の自由な働きを妨げている。では、どうすればよいのか。結局聖書に帰ることである。聖書が御霊について教えていることに、徹底して聞くことである。多くのキリスト者は、聖書が教えている十分の一も、御霊の働きを体験していないように思うことがある。御霊の異常な現れではなく、御霊の正常な働きに関してである。

その理由は明白である。聖霊の働きと祈りが、被造物管理の使命から切り離されているからである。個人の内面的なきよめや宣教の文脈の中でのみ語られてきた。一番大切な使命を忘れて信仰生活を歩んできた。その結果、この二つのすばらしい恵みは、力を発揮する場を見出せなかったのである。

新しい神学のパラダイムにおいても、聖書が中心に置かれている、それは上からではなく、下から支えるという意味においてである。そのように述べた背景説明をこの辺で終わりたいと思う。被造物管理の神学は、決して聖書を軽視しているのではない。聖書を、聖書として真に敬意を払うため、人間の理解力や祈り、聖霊の働きを大切にしているに過ぎない。聖書は、依然として神学の中心にある。

それでは、被造物管理の神学が考える「聖書論」に入っていくことにしよう。

Ⅱ．神のことばである聖書

キリスト教は、聖書に基づく宗教である。従って、聖書をどのように見るのかは、キリスト教理解の鍵となる。プロテスタント教会の信仰告白や信仰基準は、そのほとんどに「聖書は信仰と生活の唯一の規範である」という文言がある。キリスト者の信仰生活に必要な事項は、聖書の中に記されている、との告白である。宗教改革者たちは、「聖書のみ」という標語を高く掲げた。聖書が、当時のカトリック教会の制度、組織、伝承、神学を改革する基盤だったからである。信仰に必要な真理はすべて、聖書に啓示されていると確信していた。

1．神は聖書を通して御心を啓示された

キリスト教にとって、聖書は信仰の要である。聖書から離れると、キリスト教信仰は崩壊する。聖書の上に何かを置いた途端、それはキリスト教ではなくなる。聖書には、人間が必要とする神に関する真理は、すべて啓示されている。組織であれ、人物であれ、主義であれ、どのようなものであっても、聖書の上に置かれるなら、聖書は信仰の基盤でなくなる。やがて、聖書の上に置かれたものが、時間とともに信仰を規定していくようになる。

では、聖書とは、どのような書物なのか。

聖書は「神の啓示の書」である。それは、時代を超えたすべての人に、神が語りかけようと記された書物である。その意味では絶対的なものである。と同時に、聖書は、特定の人々に、特定の人々を通して、特定のメッセージを伝えるために記された。その意味では相対的なもので、人間の限界に包まれた書物である。このような二つの側面をもつ書物は、世界に例がない。それは、イエスの中に「神性」と「人性」とが共存しているとか、神はこの世界に対し「超越者」であると同時に「内在者」である、というような事柄に類比される。

聖書は、紀元前1300年頃から紀元後100年ぐらいの1400年以上の年月にわたって記された。その著者には、王、政府高官、預言者、祭司、牧羊者、漁師、取税人、政治家、ユダヤ教教師、詩人、知者などが含まれる。

この聖書は、毎年、1 億冊以上頒布されており、文句なく世界のベストセラーであり、ロングセラーである。ウイックリフ聖書翻訳協会の 2012 年 11 月のレポートによれば、翻訳されている聖書の言語数は、2,798 に達する（旧新約聖書 518 語、新約聖書のみ 1,275 語、分冊 1,005 語）。現在翻訳を進めているのは、2,075 の言語においてである。しかし、未だ手つかずの言語が 1,967 語ある。同協会は、これにも順次対応していこうとしている。このような書物は他に類例がない。

聖書は神の言葉なのか。神の権威があるとどうして分かるのか。この問に答えようとすると、ジレンマに陥る。もしその権威を理性によって証明しようとすると、理性を聖書より上に置くことになる。その証明を聖書の証言に求めると、循環論法に陥る。どちらで弁護しても、問題は残ってしまう。とすれば、批判を承知の上で、ここではあえて後者の論理で話を展開する。講演を聞いている皆さんの多くが、キリスト者だと思うからである。

聖書の権威の根拠は、聖書そのものにある。聖書には、神が直接語られた言葉が記されている。その事実こそ、聖書の権威の土台である。聖書は、神の存在について論じていない。神は存在するという前提で（詩篇 14:1 など参照）、すべてが展開されている。人間は、神の方から語りかけてくださらない限り、自分から神に到達することはできない。神はそのことをよくご存知である。だから、創造も、神の語りかけによってなされた（創世記 1:3、6、9、11 など参照）。神は、アブラハムに語りかけた（創世記 12:1-3、15:1 など）。族長たちの一人一人に、モーセをはじめとするイスラエルの指導者たちに、士師や王や預言者たちに、その時その時必要な事柄を語られた。

サムエルはサウルに、「神のことばをお聞かせしますから」と述べている（Ⅰサムエル 9:27）。神の人シェマヤに「神のことばがあった」（Ⅰ列王記 12:22）。「神のことばがナタンにあった」（Ⅰ歴代誌 17:3）。旧約聖書のモーセ律法は、その条文のすべてが神のご意思だった。イエスも、「まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます」と語られた（マタイ 5:17）。それぞれの預言書が残した言葉の一つ一つは、すべて神から託宣されたものだった（イザヤ 1:1、エレミヤ 1:4 など参照）。預言に関しペテロは、「預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです」（Ⅱペテロ 1:20-21）と述べている。

預言者イザヤをとおし、神は、ご自分のことばが必ず成就することを、繰り返し宣言している。

> わたしの口から出ることばは正しく、取り消すことはできない。（イザヤ 45:23）
> わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。（イザヤ 55:11）
> 「あなたの上にあるわたしの霊、わたしがあなたの口に置いたわたしのことばは、あなたの口からも、あなたの子孫の口からも、すえのすえの口からも、今よりとこしえに離れない」と主は仰せられる。（イザヤ 59:21）

旧約聖書自身が、旧約聖書に神の権威があることを証言している。しかし、それだけではない。新約聖書も同様である。ヨハネは、「神がお遣わしになった方は、神のことばを話される。神が御霊を無限に与えられるからであ

る」と、イエスについて語った（ヨハネ3:34）。そのイエスは、悪魔の誘惑に遭われ、「と書いてある」と申命記の言葉を引用された（マタイ 4:4、6、10）。旧約聖書を神の権威あることばとして活用されたのである。イエスはまた、ご自身のことを話すのに、旧約聖書を用いられた。「それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた」（ルカ24:27）。「イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて」（ルカ 24:45）、キリストご自身のことを語られたのである。

それだけではない。イエスは、ご自分の言葉を神の権威をもつものとして語った。「わたしの言うことを信じなさい」（ヨハネ4:21）とか、ご自分の言葉を「決して滅びることはありません」（マルコ13:31）と宣言された。イエスは、ご自分の言葉を神のことばとして提示しただけでなく、「神から出た者は、神のことばに聞き従う」と言われた（ヨハネ8:47）。それゆえ、イエスの弟子たちは、復活後に「聖書とイエスが言われたことばとを信じた」（ヨハネ 2:22）。

> だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。わたしを拒み、わたしの言うことを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことばが、終わりの日にその人をさばくのです。
>
> （ヨハネ 12:47-48）

> 「わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているのではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。」（ヨハネ 14:10-11）

パウロは、神のことばを余すところなく語ることが自分の使命であると確信していた（コロサイ 1:25）。彼がキリスト者にメッセージを取り次いだとき、神のことばとして受けとめることを期待していた。

> あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。（Ⅰテサロニケ 2:13）

このような神の言葉は、すばらしい特質をもっている。「神のことばは、すべて純粋」（箴言 30:5）、「神のことばは永遠に立つ」（イザヤ 40:8）。従ってキリスト者は、「神のことばにつけ足しをしてはならない」（箴言 30:6）。「神のことばを曲げてはいけない」（エレミヤ23:36、Ⅱコリント4:2）。「神のことばに混ぜ物をして売ってはいけない」（Ⅱコリント 2:17）。イエスは、「自分たちの言い伝えのために、神のことばを無にしてしまう」（マタイ 15:6）とか、「自分たちが受け継いだ言い伝えによって、神のことばを空文にする」（マルコ 7:13）と、パリサイ人を非難した。彼らが、伝承によって神の言葉をないがしろにしていたからである。使徒たちは、「神のことばをあと回しにする」ことはいけないと述べている（使徒 6:2）。

2. 神は聖書を霊感によって与えられた

聖書が神の言葉であるという神学的な根拠は、聖書が神の霊感によって記されたという事実にある。普通の書物は、著者がいて、著者が書きたいことがあるので、書物を出版する。ところが、聖書はそうではない。書きたいことがあり、書物を出版しようとしたのは、神だった。神は、書く人を選び、その人に聖霊の助けを与えて聖書を書かせたのである。

> それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。（Ⅱペテロ 1:20-21）

聖書は「決して人間の意志によってもたらされた」ものではない。世の中に出ている書物はすべて、「人間の意思によってもたらされた」ものである。聖書は全く違う。それは、「聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語った」ものだからである。「動かされる（フェロメノー）」とは、「運ばれる」との意味である。聖霊が主導権を持ち、人をご自由に運ばれ、神の言葉を語らせたのである。結局聖書の著者は、人間ではなく、聖霊だった。聖霊などという、わけのわからない言葉を持ち出さないでほしい、そういう人がいるだろう。その気持ちは、よく分かる。だが、今論じているのは神学の世界である。哲学の世界ではない。神学の世界は、神への信仰、キリストの贖いの信仰を絶対的なものとして受け入れた人々の営みなのである。

この箇所でペテロは、「聖書の預言」を問題にしている。つまり、旧約聖書に出てくる預言者の言葉である。しか

しここでペテロは、ある特定の預言者に言及しているわけではない。むしろ、代表的な例として預言者を挙げている。従って、預言者の言葉に限定せず、旧約聖書全体について述べているものと理解してよいであろう。

さらに、キリスト教界は、この「聖書の預言」という言葉に、新約聖書も含めて解釈してきた。この手紙を書いているペテロ自身が、かつての預言者たちのように聖霊に動かされていると自覚していたかどうかは分からない。しかし、旧約聖書の著者たちの多くも、聖霊の導きのもとに書いていると自覚していたわけではなかった。結局神の摂理の御手のもとで「聖書」として集められたこと自体が、神の言葉であることを証ししている。その意味で、神の霊感の教理は、神の摂理の教理と切り離して考えることはできない。

聖書を書かせた聖霊の働きを、パウロは「霊感」と呼んでいる。パウロの次の言葉は、聖書について論じるとき、必ず引用される重要な言葉である。

> けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい。あなたは自分が、どの人たちからそれを学んだかを知っており、また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。（Ⅱテモテ 3:14-17）

「聖書はすべて、神の霊感による」という句こそ、この箇所のキーワードである。「霊感」の原語「セオプニューストス」は、「神が息を吹きかける」が語源である。聖霊が著者に働きかけ、書物を著わさせる働きを象徴的に表現した言葉である。

霊感という聖霊の働きかけは、聖書記者個人に限定されたもの、と考えない方がよい。最初の資料の著者に始まり、その書が最終的に編さんされ、正典の中に組み込まれるまでの全過程に対し、聖霊の霊感という働きを認めることが重要である。即ち、神学の世界で「原典」という言葉が使われるときは、正典編集時において確認された本文（即ち、現在手にしている聖書）を指す。途中の段階におけるテキストではない。

福音派の聖書論では、この「霊感」の後にすぐ、「誤りがない」という言葉を続ける。「聖書は霊感を受けて書かれたので、誤りがない」と。しかし、実際には、このテモテへの手紙第二３章のみ言葉は、そのような聖書の無謬性を教えていない。この点について、三つのことをコメントしておきたい。

まず、「幼いころから聖書に親しんで来た」という句である。テモテが幼いころから親しんできた聖書とは、ヘブル語聖書ではなく、ギリシャ語訳聖書だった。「親しんで来た」といっても、聖書が家の中にあり、毎朝デボーションで読んでいたかのようなイメージをもってはいけない。一軒に一冊の聖書があるようになったのは、16 世紀に印刷機が発見されて以降のことである。

ところで福音派は、「聖書は原典において誤りがない」と告白する。「原典」とわざわざ断り書きをするのは、ギリシャ語やラテン語の翻訳聖書ではなく、ヘブル語の聖書を指す。この聖句に基づいて論じているときに、原典を持ち出すのは、実はパウロの述べている趣旨を逆なでしていることになる。パウロ自身は、原典ではなく、ギリシャ語訳旧約聖書に言及していたからである。

二つ目は、「聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせる」という句である。ここでパウロは、聖書の書かれた目的を明確にしている。一言で要約するなら、キリストを信じて救いを受ける、ということである。聖書はキリストについて証している、この点に関しイエスは、パリサイ人に次のように語られた。

> あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。（ヨハネ 5:39-40）

イエス時代のパリサイ人は、「聖書の中に永遠のいのちがあると思い」、聖書を調べていた。イエスは、その点を否定しなかった。問題は別のところにあった。イエスは、聖書は「わたしについて証言している」と明言し、「あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません」と非難した。彼らが「永遠のいのち」を求めて聖書に近づいたこと自体は間違っていなかった。だが、聖書は、それ以上のことを要求していた。聖書の中にキリストを発見し、キリストのところに来ることを求めたのである。聖書が求めているものを実行しないなら、いくら聖書を調べても無意味なことをしていることになる。今の時代も、変わらない。多くの人が、聖書を読みながら、キリストのもと

にひれ伏し、永遠のいのちを受け取っていない。それでは聖書読みの聖書知らずになる。

聖書はイエスについて証言している。直接的な証言も、比喩的な証言も、神学的な洞察をもって読み取るべき証言も、いろいろある。いずれにしても、旧約聖書は、イエスを証言している。イエスは復活後、12 弟子に、旧約聖書を紐解きながら、ご自身の身に起こった事柄を話された。福音書の著者ルカは、この出来事を次のように伝えている。

> さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる」(ルカ 24:44-47)。

イエスはここで、ご自身の宣教について二つのことを述べている。一つは、十字架以前の宣教であり、もう一つは十字架以降の宣教である。十字架以前のイエスは、「わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就する」と宣べ伝えていた。「モーセの律法と預言者と詩篇」とは、旧約聖書のことである。旧約聖書という呼び方は、新約聖書が出来上がって初めて意味のある呼び方である。ユダヤ人たちは、旧約聖書を「タナク」と呼んだ。「タ」は「トーラー」の「タ」で「モーセの律法」を、「ナ」は「ナヴィーム」の「ナ」で「預言者」を、「ク」は「ケトゥビーム」の「ク」で「詩篇など」を指す。つまり、「モーセの律法と預言者と詩篇」という表現は、ユダヤ人の旧約聖書に対する呼び方だった。旧約聖書はキリストを証言している。そして、それは「必ず全部成就する」と、イエスは十字架以前から宣べ伝え続けていたのである。

復活されたイエスは、「キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改め」を宣べ伝えた。キリストの死とよみがえり、悔い改めによる罪の赦し、これこそキリスト教の中心的なメッセージだった。イエスは、このメッセージが「エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる」と言われた。それ以降のキリスト者たちは、このメッセージを携え、全世界の宣教に邁進してきたのである。

三つ目のコメントは、「教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるため」との言葉に対してである。この文章は、聖書の目的を表わすというより、聖書を読んだ結果もたらされるものについて述べている。「教えと戒めと矯正と義の訓練」の四つがどのように違うのか、この点は本講演の趣旨から外れるので、今日はふれない。大切なことは、「神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者」となることである。聖書は、キリストの救いを明らかにするだけでない。キリスト者を神の国の働き人にふさわしく整えることにある。

ちょっと回り道をしてしまった。では、聖書の霊感の問題に戻ろう。
神は霊感によって聖書を著された。その際、人を聖書記者として用いられた。その記者が誰であるのかは、むろん重要である。神は、記者がもつものすべてを、最大限に生かされた。著者は、突然恍惚状態に陥り、お筆先のようになって、神からの啓示を書いたわけではない。神は、ごく自然で正常な状態にある著者を用いた。著者は、自分の理解できる言葉で、自分の文化圏を背景にしつつ、書こうとするテーマの目的にふさわしい表現技法を駆使して、聖書を著した。使った言語はヘブル語であり、ギリシャ語だった。その単語の意味と文法は、日ごろから使われていたものだった。

霊感を考える場合、著者同様、読者のことも併せて考えておく必要がある。神が語りかけようとした人々の状況である。彼らは、著者と同時代の人々であり、近隣諸国の文化的背景を共有していた。基本的には、同じ信仰に生きる人々、もしくはその信仰を求める人々だった。著者が書く文章は、特別なものでない限り、彼らもすべて理解できたはずである。

神は、神の民に知らせたいと望んだことを、一度にすべて教えたわけではなかった。それは、普通の教育と同じである。初歩から高度に、表面的なところから奥深くに、単純なところから複雑なところへ、と徐々に啓示された。例えば、キリストについてである。最初は、人間の創造のときに神が相談された相手として出てくる(創世 1:26 の「われわれ」)。次に、人間の堕落の時に、その到来が予告された(創世 3:15)。その後、キリストと思われる方がしばしば登場する。例えば、アブラハムを訪れた天使の一人(創世 18:1)、ヤコブが相撲を取った相手(創世

22:22-32)、モーセに芝の中で語りかけられた方(出エジプト 3:1-6)、ダニエルと共に火の中に伴われた方(ダニエル 3:25)などである。詩篇の中にも(例えば、詩篇 110:1-4)、預言書の中にも(イザヤ 52:13-53:12)、贖い主キリストの姿は、徐々に明らかにされている。

3. 神は聖書をキリスト教の「正典」として与えた

聖書論において、聖書の正典という問題はとても重要である。この問題を本格的に論じるには、一冊の書物を要する。しかし、被造物管理の神学においては、聖書の正典論に関し、特別な主張をもっているわけではない。従ってここでは、キリスト教界にとって常識的な事柄(従来のパラダイムで受けとめられてきた教理)を、簡潔に述べるに留めておこう。

どの宗教であっても、信仰者が拠って立つところの教典がある。キリスト教ではこれを、基準を意味する「正典(カノン)」と呼んでいる。聖書の正典とは、教会会議が、聖霊の霊感によって書かれたと認めた文書のことである。ユダヤ教では、ヘブル語聖書(一部アラム語)のみが正典である。キリスト教は、旧約聖書と新約聖書の両方を正典と告白する。

ユダヤ人教は、神の言葉としての正典の書を「タナク」と呼んでいる。「タナク」とは、「トーラー」、「ナヴィーム」、「ケトゥビーム」の頭文字を取って名づけられた。律法(トーラー)は、創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の 5 巻である。預言者(ナヴィーム)は 8 巻であるが、前預言者 4 巻(ヨシュア記、士師記・ルツ記、サムエル記、列王記)と後預言者 4 巻(イザヤ書、エレミヤ書・哀歌、エゼキエル書、12 章預言書)に分かれている。三番目の諸書(ケトゥビーム)は 11 巻である。真理(エメト)は 3 巻(詩編、箴言、ヨブ記)、巻物(メギロート)は 5 巻(雅歌、ルツ記、哀歌、伝道者の書、エステル書)、その他 3 巻(ダニエル書、エズラ記・ネヘミヤ記、歴代誌)である。

ユダヤ教では、紀元前 2 世紀頃には、これらの書物を「正典」として受け入れていた。しかし、正式な確認をしたのは、紀元 90 年頃のヤムニア会議だった。イエスや一世紀半ばの使徒時代のキリスト者は、ユダヤ人の伝統をそのまま引き継いだ。その結果、ユダヤ教の「タナク」を神からの啓示の書物として受けとめた。その上に、キリスト信仰を確立していった。さらに 2 世紀から 4 世紀にかけ、キリスト教会は現在の新約聖書 27 巻を収集し、「正典」とした。その結果、旧約聖書と新約聖書の両方が「正典」になった。

教会が、このように旧新約聖書を「正典」として受けとめたのは、聖霊の特別な働きに基づいていた。聖霊は、霊感の働きによって聖書を生み出した。聖霊は、それだけでなく、その聖書を教会が「正典」として受けとめるよう導かれた。教会が聖書を正典として受けとめるためには、この両方の聖霊の働きが必要だった。

カトリックとプロテスタントには、聖書が絶対の権威をもつ「正典」であるとのコンセンサスははじめからあった。ところが、宗教改革時代になると、カトリックとプロテスタントの間に正典の範囲に関する議論が起こった。カトリックのトリエント公会議は、ラテン語のヴルガータに含まれている書物を正典と決定した。その結果、旧約 46 巻、新約 27 巻、合計 73 巻が「正典」になった。プロテスタントは、トリエント公会議が旧約聖書と外典の区別を取り除いてしまったと批判し、旧約 39 巻と新約 27 巻の 66 巻を「正典」とした。カトリックは、聖書は教会の権威によって正典になったと考えた。プロテスタントは、教会は聖書の権威を確認したに過ぎない、と見なした。この微妙な違いが、正典の範囲の相違をもたらした。

日本では、1980 年に、カトリックとプロテスタントが協力して、『新共同訳』を出版した。その際、カトリックのみが正典として認める第二正典は、続編として収録された。その結果、続編付きの聖書と、続編が付いていない聖書の二種類が出版された。その続編には、トビト記、ユディト記、エステル記(ギリシャ語)、マカバイ記、知恵の書、シラ書(集会の書)、バルク書、エレミヤの手紙、ダニエル書補遺、エズラ記(ギリシャ語)、エズラ記(ラテン語)、マナセの祈りが収録されている。

新共同訳聖書の巻末には、「旧約聖書続編」の解説があり、これらの書物の内容が紹介されている。福音派のキリスト者は、これらの書物を読む機会はほとんどないだろう。もしカトリックからカリスマまでと標語を掲げ、エキュメニズムを本格的に志向するのなら、少なくとも一度は、じっくりこれら続編を読みとおしておいた方がよい。考えが違うからというだけで近づかないのは、この辺で卒業したいものだ。違う人と話すのは、とても楽しいことである。

Ⅲ. 聖書の無誤性に関する論争

どのような宗教グループであっても、極端になり、先鋭化する危険性をもっている。プロテスタントの福音主義者も、例外ではなかった。彼らは、「聖書の霊感」を強調し、「聖書は御霊によって十全に霊感されたもので、原典において誤りがない」との旗印を掲げ、福音派の教会の結集を図った。それはすばらしい運動であった。ところが、この「誤りがない」という句の理解をめぐって、20 世紀後半の福音派は、大きな論争の渦に巻き込まれることになった。本章では、この問題についてふれておこう。福音派は、もう一つ、聖霊のカリスマ運動にも巻き込まれる。この問題は、別の機会にお話ししよう。

1. 福音派内で無誤性論争が始まった

キリスト教は、神の啓示は聖書に表されたと信ずる。従って教会は、その初めから「聖書がどのような書物か」を論じてきた。しかし、聖書論が教理史上の中心テーマになるのは、聖書批評学が起こってからである。19 世紀以前のキリスト教神学においては、聖書論が論議されることはなかった。

この聖書に関する論争は、三回にわたりアメリカを中心に展開された。最初は、1880 年代に、ベンジャミン・ウォーフィールドやチャールズ・ホッヂたちと、ブリッグスやスミスとの間で論争された。二番目の論争は、それから 50 年後の 1930 年代に、グレシャム・メーチェンを代表的人物とする根本主義者と、自由主義・近代主義者との間で、繰り広げられた。そしてそれからさらに 40 年後の 1970 年から 80 年にかけ、今度は聖書の無誤性論争が展開されたのである。

この三回目の論争は、それまでの二回とは二つの点で異なっていた。一つ目の違いは、前の二つの論争が、歴史的キリスト教の信仰内容を擁護する学者と、それを否定する学者との間で起こった論争だった。ところが三番目は、両方とも福音主義者を自認する学者間の論争だった。つまり、両者とも、聖書の権威、キリストの処女降誕、奇跡、贖罪の死、肉体の復活、再臨などのキリスト教正統派の基本的教理については、同じ信仰に立っていた。

二つ目の違いは、論争の内容に関してである。以前の二つの論争は、「聖書が霊感によって書かれた神のことばかどうか」をめぐっての論争だった。ところが、三番目の論争の中心点は、聖書が神の霊感によって記されたとき、どのような事柄においても誤りから免れていたかどうか、ということにあった。これは、聖書への疑いや批判に対し、正しい聖書観を確立するためには避けられない論争だった。

この福音主義者間の聖書論論争は、1958 年にエヴァレット・ハリソンが著した「聖書の現象」、あるいは、翌 1959 年のエドワード・ロヴレェースによる「無誤性－歴史的見通し」の論文に、端を発した。両論文とも、聖書に見られる矛盾、対立、解釈上困難なテキストと、霊感の性格（無誤性）との関係を論ずるものだった。以降、これらの聖書箇所を「聖書の現象（phenomena of Scripture）」と呼ぶ習わしになった。

もともとプロテスタントは、カトリックのローマ法王の「無謬性（infallability）」に対抗するため、「聖書の無謬性（infallability）」を主張してきた。しかし、そのような「無謬性」を表明するだけでは不十分だと考える人々が現われた。彼らは、「聖書は、歴史的・科学的な事柄においても、一切誤りがない」と主張し、「無誤性（inerrancy）」という言葉を使うべきだと主張し始めたのである。

この無誤性論争は、さして間を置かず、日本にも飛び火するところとなった。そして日本の全福音派の教会と神学校を巻き込むことになった。それは、日本の福音派がアメリカとは異なる歴史をたどっていたからである。

第二次世界大戦後、戦前から存在した一部の福音主義の教会は、日本キリスト教団を離脱した。また、アメリカをはじめヨーロッパ各国のプロテスタントの各教派は、多くの宣教師を日本に派遣し、母国と関係の深いブランチ教会を形成した。この二つのそれぞれのグループは、プロテスタント宣教 100 周年を記念して、1959 年に「日本プロテスタント聖書信仰同盟」を結成した。その時の結集の合言葉は、「聖書は誤りのない神の言葉」だった。日本の福音派の教会は、この「聖書信仰」を旗印に、60-70 年の学園紛争を乗り越え、教会・教派の形成に励んだ。

そのような日本の福音派の教会の中で、1970 年代から 80 年にかけ、アメリカで起こった聖書の無誤性論争が

繰り広げられることになったのである。福音派の神学校の多くは、その設立当初からアメリカの神学校と深く結びついていた。加えて、神学校の教師たちも、アメリカ留学の経験者が多かった。従って、アメリカの教会（神学校）がくしゃみをすれば、日本の教会（神学校）が風邪をひくという状態にあった。

新会堂の 3 階、階段を上りきった正面に本棚がある。その本棚に、「ティンダル聖書注解シリーズ」の註解書が置かれている。いのちのことば社が、創立55周年を記念し、2004年から日本語訳を出版してきた。この4月には、全 48 巻の翻訳が完成した。日本の福音派の神学校では、このシリーズは教科書的な位置を占めることになろう。大変うれしく思っている。

しかし、30 年前には、このような状況を予測できなかった。当時私は、日本プロテスタント聖書信仰同盟（日本福音同盟の前身。JPC と略す）の機関誌「聖書信仰」の編集委員をしていた。その立場で日本のキリスト教界（カトリックからカリスマまで）を見ると、日本の福音派は、従来の聖書解釈と信仰理解から脱却しない限り、大変な遅れを取り、取り返しのつかないことになるだろう、と感じていた。そこで、「聖書信仰」誌に、「聖書の無誤性をめぐって」という小論文を 11 回にわたって掲載した。その誌上で、このティンダル聖書注解シリーズを紹介しつつ、福音派は健全な聖書批評学を受け入れながら大きく発展していくであろう、との希望的観測を述べた。

しかし、この記事は、思いがけない反発を招いた。当時は「聖書の無誤性に関するシカゴ声明」が発表された（1978 年）直後でもあり、無誤性を強力に主張するグループから厳しい批判を受けることになった。JPC 理事会は、問題を鎮静化させるため、83 年の総会（於天城山荘）において、5 時間以上に及ぶ「無誤性に関わる神学論争」の場を設けた。その結果、最終的には、私と機関誌の編集長だった村瀬俊夫氏とが引責辞任をして、幕引きが行われた。

歴史は、いろいろな経緯をたどる。だが、必ずより良い方向に（あるいは、真理に）近づいていく、私自身はそう信じてきた。神の国の民の歩みも、その点は変わらない。このティンダル聖書注解シリーズが一巻ずつ翻訳出版される度に、心の中で喝采の拍手を送り続けてきた。時代の流れは、それが真理に近づいていく限り、誰も留めることはできない。そんな思いを深めてくれる出版事業だった。

だが本当は、この程度の書物の出版で満足してはならない。日本の福音派にもたくさんの若き聖書学者たちが出てきている。そうであれば、翻訳ものに頼らず、聖書信仰に立ちながら日本人による日本語の聖書註解書シリーズを出版する責任がある。そんなふうに思い、先ずはサンプルとして、マタイの福音書の註解書を出版した（全三巻、2004 年）。その後若き学徒たちと執筆の交渉をしてきたが、個人の力ではどうにもならず、その夢は頓挫してしまった。残念ながら、未だ、日本の福音派は、聖書全巻の註解書をシリーズで出すほどの力はなかった。今しばらくは、翻訳もので我慢しなければならない。

2.「聖書の現象」とは何か

ここで、論争のきっかけになり、最初に提起された「聖書の現象」という問題がどのようなものなのか、説明する必要があろう。それを理解するため、「聖書の現象」ではなく、教会史の初めから分かっており、コンセンサスがあった事柄について、あらかじめ話しておくのがよいだろう。

①聖書記者が用いている常識的・現象的表現は、「聖書の現象」ではない。例えば、月が「小さいほうの光る物」（創 1:16）と言われている。あるいは、「日は上り、日は沈み」（伝道 1:5）と叙述されている。このような表現は、日常言語であり、間違いとは見なさない。

②概数、誇張法、詩的・象徴的・比喩的表現などは、「聖書の現象」とは考えない。例えば、創世記 15 章 13 節の「400 年」は、「430 年」の概数である（出 12:40）。マルコは、エルサレムの「全住民」がバプテスマのヨハネの所に集まってきた（マルコ 1:5）と述べている。パウロは、福音が「世界中で、実を結び広がり続けている」（コロサイ 1:6）と記している。このような表現は誇張法である。「天の水門」（創 7:11）とか、「天を張り延ばし」（ヨブ 9:8）などは詩的表現である。これらは、間違いとは言わない。

③聖書記者たちは、常に同じ基準を採用したわけではない。1 キュビトの長さは出エジプト記 27 章 1 節や歴代

誌第二 4 章 1 節とエゼキエル書とでは違う(エゼ 40:5、43:13)。ある歴史書では、王の統治開始年を 1 年としている。ところが、翌年を 1 年とする歴史書もある。

④文法的に変則的な用法もある。例えば、黙示録のギリシャ語はヘブル語の影響を受けており、標準的なギリシャ語文法から見れば変則的である。また、綴り字の相違は、名前その他にしばしば見られる。例えば、イエスの十字架上での神に対する呼びかけは、「エリ」とも(マタイ 27:46)、「エロイ」とも(マルコ 15:34)報じられている。名前などの起源に対する聖書の説明は、しばしば音声に基づいている。それは、今日の言語学的研究から見るとおかしい場合が少なくない。そこでは言葉遊びがなされているのであって、間違いとまでは言えない(例えば、創 11:9 の「バベル」など)。

⑤出来事は、必ずしも年代順に記されてはいない。このことは、四つの福音書を比較するとよく分かる。それに、著者によって記述の視点は全く異なっている。歴史書においては、出来事が要約されたり、断片的に伝えられたり、編集されているのは、ごく普通のことである。歴代誌は、列王記と同じ時代の歴史を扱っているが、神殿礼拝にフォーカスをあて、かなり違った歴史を描写している。

⑥新約聖書は、旧約聖書を忠実にギリシャ語に訳出して引用する場合もある。しかし、七十人訳ギリシャ語聖書をそのまま引用したり、自由に要約しながら訳出しているようなケースもある。そのような自由な引用方法は、当時の誰もがしていた方法だった。

以上のような問題は、神が聖書記者に委ねられた範囲内のことだった。従って、これらのことを「聖書の現象」と見なす必要はない。では、「聖書の現象」とは、どのようなことを言うのか。細かな例を挙げればきりがない。ここでは代表的なものだけを紹介しておこう。

①サムエル記および列王記と、歴代誌との間に見られる数の不一致である。例えば、騎兵の数 1,700 人(Ⅱサム 8:4)が、並行記事では 7,000 人(Ⅰ歴 18:4)となっている。「歩兵 2 万、王の兵士 1 千、トブの兵士 1 万 2 千」(Ⅱサム 10:6)が、並行記事では「戦車 3 万 2 千台」(Ⅰ歴 19:7)である。「戦車兵 700」(Ⅱサム 10:18)が、「戦車兵 7,000」(Ⅰ歴 19:18)になっている。イスラエルの兵士 80 万、ユダが 50 万である(Ⅱサム 24:19)のに対し、それぞれ 110 万と 47 万(Ⅰ歴 21:5)となっている。普通、歴代誌の数の方が大きい。しかし、「馬屋 4 万」(Ⅰ列 4:26)に対し、「4 千の馬屋」(Ⅱ歴 9:25)となっており、逆の場合もある。

②聖書の歴史的記録が聖書外の資料と合わないケースがある。代表的なものは、ペカが 20 年間統治したこと(Ⅱ列 15:27)、アッシリヤのセナケリブ王がユダを侵略したのがヒゼキヤ王の 13 年に起こったという記述(Ⅱ列 18:13)である。イスラエルの民の出エジプトの年代は、考古学上の証拠に照らすと、150 年ほどずれる。

③聖書の記述が科学と矛盾する、という問題がある。ヨシュア記 10 章 12-13 節において、太陽と月が丸一日動かなかったという記録は、科学的に考えるとあり得ない。宇宙のビッグバンの出来事が 138 億年前に起こったこと、地球は 46 億年前に形成されたことなど、現代科学が解明している宇宙像は、旧約聖書に見られる世界像と異なっている。これらの事柄を「聖書の現象」という言葉に含めるのがふさわしいかどうか、私には分からない。少なくとも、この種の問題があることは、指摘しておく必要があろう。

④福音書間に見られる相違もまた、よく指摘される。例えば、マルコの福音書では、弟子は伝道旅行の際杖を持っていくように言われている(6:8)。ところが、他の共観福音書では杖を持っていかないように言われている(マタイ 10:10、ルカ 9:3)。主イエスによっていやされた悪霊につかれた人は、マタイでは 2 人(8:28)なのに、他では 1 人である(マルコ 5:2、ルカ 8:27)。マタイによれば、主イエスがエリコを出ていくときに 2 人の盲人はいやされた(20:29-30)。ところがルカによれば、主イエスがエリコに近づいたとき 1 人の盲人がいやされた(18:35-43)。同じ出来事が、マルコによれば、いやしが起こったのは主イエスがエリコを出たときだが(マタイに一致)、いやされた盲人は 1 人(ルカに一致)だった(10:46-52)。このような福音書間の相違は、ペテロが主イエスを否んだときにわとりが鳴いた回数や、イエスの復活の朝、イエスの墓に現れた天使の数などにも見られる。

⑤マルコの福音書 1 章 2 節はマラキ 3 章 1 節の引用であるが、預言者イザヤの書物にあるかのような書き方をしている。マタイの福音書 27 章 9-10 節は、ゼカリヤ書 11 章 12-13 節から引用しているにもかかわらず、預言者

エレミヤの言葉に帰している。

⑥共観福音書とヨハネの福音書間には、多くの違いが見られる。共感福音書では、エルサレムの神殿の潔めはキリストの公生涯の最後になされているのに、ヨハネは公生涯の最初に起こったこととして描いている。共観福音書によれば、最後の晩餐は「種なしパンの祝いの第一日」で（マタイ26:17、マルコ14:12、ルカ22:7）、金曜日の夕食になる。ところが、ヨハネの福音書は、「過ぎ越しの備え日」としており（13:1、18:28、19:14 など参照）、木曜日の夕食になる。

⑦使徒の働きの中で矛盾と見なされる例がいくつかある。主イエスを裏切ったユダの最後に関して、使徒の働きは「まっさかさまに落ち、からだは真 2 つに裂け、はらわたが全部飛び出してしまった」（1:18）と報じているが、マタイは「首をつった」（27:5）と記している。ステパノは、アブラハムがカランを出てカナンの地に入ったのは父テラの死後だったと語った（使徒 7:4）。しかし、創世記より計算すると、それはアブラハムが 135 才以降の時になってしまう（創世 11:26 と 32）。それでは創世記 12 章 4 節で「75 才」と言われているのと合わない。使徒 7 章 16 節でステパノはヤコブがシケムの墓に葬られたように述べているが、ヤコブはマクペラに葬られたので（創世 50:13）、ヨセフの間違いと思われる（ヨシ 24:32）。また、その墓はアブラハムが購入したようにステパノは述べているが、実際にはヤコブが購入したものだった（創世 33:19）。

⑧新約聖書の手紙の中にも、矛盾を指摘されている個所がいくつかある。パウロは、アブラハムの契約からモーセの律法までの期間は 430 年と述べている（ガラテヤ 3:16）が、この年数はイスラエルのエジプト滞在期間である（出 12:40）。実際には族長時代を加えねばならないので 600 年位になる。ユダの手紙では、外典のエノク書からの引用を、「アダムから 7 代目のエノク」（14）のことばとして引用している。ヘブル人への手紙は、詩篇 40 篇 5-8 節のギリシャ語訳を引用している。それは「耳を開いてくださいました」を拡大解釈して、「体を造ってくださいました」と、ヘブル語本文とはかなり異なった訳をしている。手紙の著者は、この訳文をさらに大胆にキリストの受肉に適用して読んでいる。

むろん、まだまだたくさんの問題を指摘できる。しかし、無誤性論争の問題を理解するためには、以上で十分であろう。これらの問題は、「聖書は誤りがない」と告白するなら、必ず回答を求められる。では、無誤性論争に関わっている学者は、どのような答えを用意しているのか。次に、この問題を取り上げよう。

3. 無誤性論争に対して 5 つの立場がある

では、聖書の霊感を信ずる福音主義者は、この「聖書の現象」に対してどのような立場をとったのか。大きく分けると、五つの立場がある。ちょっと難しい議論になるが、ついて来ていただきたい。

第一は、「聖書の現象」を無視して、無誤性を主張する立場である。その典型的な例として、ベンジャミン・ウォーフィールド（1887 年から 1921 年にかけプリンストン大学の校長だった）をあげることができよう。彼は、「我々は、申し立てられた聖書の現象を聖書の無誤性の教理に調和させるよう義務づけられてはいない。もし無理強いの釈義や人為的な釈義でなければ調和させられないとすれば、不調和のまま残される方が良い」と述べている。

ウォーフィールドは、聖書の無誤性の教理を聖書自体の証言から導き出す。そして、この教理は「聖書の現象」に照らされ、理論的には、変更されうる可能性を認める。しかし、その場合、それらの聖書の箇所はただ調和が困難という程度ではなく、明白に霊感の教理と相容れない内容でなければならない、しかも、無誤性を証詞する証拠全体よりも質、量共にまさるものでなければならない、と主張する。そして、「大部分は取るに足らないもの」、「単に外見上のもの」、「真に重要なものは驚くほど少ない」と断定した。彼は、「聖書の現象」に対しては具体的な解答を与えようとしなかった。

福音主義の聖書観形成において、ウォーフィールドが果たした役割は極めて大きかった。実際、無誤性論争は、ウォーフィールドの立場をどう解釈し、あるいはどう乗り越えるか、という形で展開された。ウォーフィールドは、聖書の証言に基づいて演繹的に聖書の権威を確立し、それを無誤性と結びつけた。彼は、聖書の権威と無誤性を切り離すことを拒否した。

だがウォーフィールドは、二つの点で後代に問題を残した。その一つは、たとえ潜在的であれ、無誤性の教理

が否定される可能性を認めたことである。これは、彼の主知主義的神学方法論を示すものである。はたしてこのような考えは、教会の伝統的立場といってよいものだろうか。もう一つは、ウォーフィールドは、「聖書の現象」や聖書の人間的要素から生じる問題には、具体的に答えようとしなかったことである。それはそれで、一つの立場ではあり得る。しかし、それを問題にする人々を満足させることはできない。

第二は、すべての「聖書の現象」は調和が可能である、という立場である。この立場に立つ人は、もし聖書の中にたとえ一つでも本当に誤りがあるなら、聖書を神によって霊感された権威ある書と見なすわけにはいかない、と公言する。フランシス・シェーファー、ハロルド・リンゼル、グリーソン・アーチャーなどが、その代表的な学者である。彼らは、指摘されている「聖書の現象」の一つ一つに、真摯な姿勢で答えようと努力した。

彼らが提供した解決法の中には、健全なものもある。しかし、極端に走り、無理な説明も目立った。例えばリンゼルは、ペテロが主イエスを否んだ回数を、福音書を調和しようとするあまり、3 回ずつ 2 度、合計 6 回だった、と結論付けてしまった。

アーチャーは、サムエル記・列王記と歴代誌との間の数の違いについて、原典が転写され、写本がつくられる過程で生じたもので、原典では一致していた、と主張する。また、ステパノの説教の中に見られる難題に対しては、次のように答える。アブラハムが父の死後カランを出た（使徒 7:4）とは、父テラの年令が 135 才以上の時にアブラハムが生まれた、と考えればよい。創世記 11 章 26 節においてアブラハムが最初に出てくるのは、長男だからではない。他の兄弟にまさって重要だったので、筆頭に置かれた。シケムの墓がアブラハムによって購入された（使徒 7:16）のは、創世記には記されてはいないが、もともと実際に起こったことであり、聖霊はステパノにそのように示された。ということは、創世記 33 章 19 節は、実際にはアブラハムが購入したものをヤコブが再購入した、という意味になる。ユダ 14 節に対しても、現在の創世記には記されていないが、文字どおり神がエノクに啓示された言葉だった、と説明する。

この立場の最大の貢献は、矛盾・対立と見なされている聖書箇所を簡単に誤りと見なさないため、多くの努力を傾注したことである。数字の違いをいつでも写本の伝達過程に帰することは賢明ではない。だが、実際にその可能性はあり得る。しかし、この立場の説明には、無理なものも多い。無誤性を前提に合理的に説明しすぎて、首をかしげたくなる解釈も散見される。聖書に敬意を払い、弁護したい一心からであることは認めても、結果として多くの人々を聖書の権威から遠ざけてしまう場合も少なくない。

第三は、「聖書の現象」を認め、無誤性の内容を再吟味しようという立場である。ここでは 3 人の学者の見解を紹介しておこう。まず、エヴァレット・ハリソンである。彼によれば、聖書自体は無誤性の教理を明白に述べていない。それは、聖書を敬う御言葉の学徒たちにより、主イエスの旧約聖書に対する態度から演繹的論理によって導出した教理に他ならない。もし無誤性の教理が演繹的に引き出されたものであれば、「聖書の現象」の一つ一つは帰納的方法によってチェックされねばならない。それらを正しく解釈することによって、無誤性が実際には何を意味しているのかを明らかにする必要がある。無誤性の教理は聖書解釈の問題と不可分だと主張したのである。
ハリソンは、「聖書の現象」に対する第二の立場の説明は極端に陥っており、無誤性を弁護するにはふさわしくない、と考えている。そして、(1)聖書が書かれた時代の文化的状況を考慮すること、(2)多様な描写は真理の統一性をさまたげるものではないこと、(3)そのテキストが言おうとする意図をくんで判断することの 3 つに配慮して「聖書の現象」を正しく解釈するよう提唱する。それでもなお、解決不能な場合は、さらに充分な証拠（資料）が整うまで忍耐をもって待つべきだと、主張する。

ダニエル・フラーもまた、無誤性の教理は「聖書の現象」によってチェックされるべきだ、と考える。彼は、神は、啓示を意図したわけではない出来事においては、最初の読者の思考に順応された、と述べている。例えば、ステパノの説教に見られる難題については、次のような説明をする。
アブラハムが父テラの死後カランを出立した（使徒 7:4）とのステパノの言明は、当時の人々の一般的な考えだった（フィロン『アブラハムの移住』参照）。確かにその時ステパノは聖霊に満たされていた（7:55）が、だからといって、聖霊は、ステパノの聴衆が間違っていたことを、ステパノを通して訂正しようとしたわけではなかった。もし、聖霊がそのような訂正をしたなら、ステパノの説教を聞いていたサンヘドリンの議員たちとのコミュニケーションは成り立たず、ステパノが真に語りたかったことは伝わらなかっただろう。

エドワード・カーネルもまた、「聖書の現象」のあるものが解決不能の場合、正統派の主張する無誤性の教理を破棄するのではなく、そこに含まれている概念を訂正すべきだと主張した。歴代誌の数がサムエル、列王記の数と合わないことをめぐって、カーネルは、次のような説明をする。

歴代誌の著者は、手もとにあった多くの歴史的資料を利用してイスラエル史を編纂した。その時使用した資料の中には、もともとの資料より500年以上も経たものもあった。歴史的資料の伝達過程においては、普通、さまざまの脱落、変更、付加などが生じる。聖霊の霊感は、それら伝達された資料の中に混入した誤りの一つ一つを指摘し、直させることまではしなかった。無誤性の教理は、「不完全な資料を正確に写す」との理解でよいのではないかと考えたのである。カーネルは、このような考えに確信があったわけではなく、一つの可能性として提案した。

この第三の立場は、「聖書の現象」を無理なく説明する道を模索した点を評価したい。私自身は、ハリソンやフラーの説明には共感を覚える。しかし、カーネルの提案にはついていけない。もし、誤った資料をそのまま使用しても、無誤性には反しないというのであれば、聖書の大半は何らかの資料が用いられているのだから、結局のところ、聖書の大部分には誤りがあり得ることになる。これでは、無誤性は実体のないものになってしまう。

第四の立場は、「聖書の現象」が指摘される以上、無誤性の教理は放棄すべきだという立場である。代表的な学者として、デューイー・ビーグルをあげることができよう。彼は、無誤性の教理を守るには、「聖書の現象」を考慮しなければならないと考え、無誤性に反すると思われるテキストを詳細に検討する。その結果、誤りとか矛盾と指摘されている多くの箇所は確かに皮相的なものである。だが、解決困難な箇所も少なくない、との結論に達した。ビーグルは、聖書の霊感を否定したわけではない。ただ、「聖書の現象」の事実を認め、無誤性の教理を聖書的見解とすることは放棄した。

私自身は、ビーグルの立場は行き過ぎだと思っている。確かに、解決困難な「聖書の現象」は存在する。しかし、調和が困難であることと、証明された誤りとは区別した方がよい。ビーグルが指摘する「聖書の現象」の多くは、人間が持つ制限性という原理を適用するなら、誤りと見なさないですむ。現在我々が手にし得る科学とか歴史情報とは、一致しないことはたくさんある。といっても、それらを誤りだと見なす必要はない。神が言おうとすること以外の点を取り上げ、間違いであるとかないというのは、行き過ぎである。両者は同じレベルで論じられるものではない。無誤性の教理から「聖書の現象」を無視すべきではない。と同時に、「聖書の現象」から無誤性を否定する誤りを犯してはならない。

五番目の最後は、無誤性の主張の背後に横たわる神学的前提と方法論を拒否し、無誤性を実質的に無視する立場である。その代表者として、ヘリット・コーネリス・ベルクーワーをあげることができよう。ベルクーワーの神学は、(1)聖書の絶対的権威を主張する時期から、(2)聖書の贖罪的内容を強調する段階、(3)聖書の実存的目的(スコープ)に焦点をあてる段階へと発展したと言われる(ベルクーワー自身は、(1)から(2)への発展を否定しないが、(2)から(3)に移ったことは認めていない)。ここでは、(2)または(3)の段階におけるベルクーワーの見解を紹介する。

ベルクーワーによれば、いつの時代であっても教会の信仰告白は、聖書が神的要素と人間的要素の両面をもつことを告白してきた。しかし、実際に人間的側面に目をとめるようになったのは、18 世紀末に起こった歴史的批評的研究の結果である。ところが、歴史的批評的聖書研究は、神的要素を否定し、人間的要素のみをえぐり出すようになった。根本主義者たちは、そのような批評学を拒否し、再び、聖書の人間的要素を軽視する道を選んでしまった。その結果、神的側面のみを強調し、聖書の権威を弁護するため、聖書のドケティズム的(化現論的)理解に陥ってしまった。

聖書の人間的要素は、決して偶発的、付随的なものではない。我々の全関心を集中させるべき重要なものである。何故なら、神の啓示は時間と歴史を超えた出来事ではなく、まさに、その真只中で与えられたからである。神は聖書記者を機械としてではなく、生ける器として用いた。つまり、一定の場所、時間、状況の中に生きる人をとおし、当時の思考方法、概念、習慣などを用いて啓示された。従って、神のことばを聴くためには、書かれた時代の文化的脈絡や言語の意図を考慮せねばならない。

無誤性という用語は、聖書記者がその時代に生きた器として用いられた事実を軽視させてしまう。あるいは聖書の証言的内容より、書かれた形式の部分に目を向けさせてしまう。科学及び歴史の領域においても誤りがないと弁護する人々は、真剣な動機からしていることを認めるが、最終的にはそれは聖書に対する敬意を育てるより、傷つけてしまうことになる。

ベルクーワーが、聖書の人間的要素を充分に認め、聖書の内容とスコープとの関連で聖書の権威を擁護し、その根拠を知的弁証ではなく、聖霊の内的証明に求めた点は、大いに評価できる。確かに、福音派の無誤性理解は聖書のメッセージとスコープから離れ、形式を重視することだけが 1 人歩きしてきた観がある。人間的要素を無視し、客観的真理性を強調しすぎるきらいがある。両方が等しく大切にされねばならないというベルクーワーの主張には、私自身も納得している。

最後に、ベルクーワーの延長線上にある、ジャック・ロジャースの見解を紹介して終ろう。

ロジャースによれば、聖書の権威を確立するにあたり、福音主義者の間に二つの違った立場がある。一つは、理性を信仰の上に置き、(アリストテレス的帰納法に基づいて)特殊から一般原則を導出しようとするグループである。彼らは、もし聖書の一か所にでも、矛盾とか(科学的、歴史的事項に)誤りがあるとすれば、聖書の権威はなくなってしまう、と考える。今日、無誤性を強力に主張する学者は、このような論理をもつ人たちである。彼らは、スコラ神学、プロテスタント＝スコラ主義、アレクサンダー、ホッヂ、ウォーフィールドなどの旧プリンストン学派の流れをくむ人たちで、聖書を聖書批評学から守ることを最大の使命としている。

もう一つは、信仰を理性の上に置き、(プラトン的演繹法に基づいて)ある公理から一般原則を導出しようとするグループである。彼らは、聖書は神の啓示であるゆえ、神の権威をもつとの信仰告白に立つ。一世紀の大部分の弁証家、オリゲネス、アウグスチヌス、ルター及びカルヴァンなどの宗教改革者、ウェストミンスター信仰告白の提唱者、英国のジェームス・オア、オランダのヘルマン・バフィンク、アブラハム・カイパー、ベルクーワーなどは皆、この立場だった。「聖書の現象」は、神の救いに関する啓示が人間の限定された言語と思考という不完全な形態においてもたらされた結果、生じたものである。従って、聖書の権威は、あらゆる領域において主張されるべきものではない。しかもそれは、人間理性の弁証によってではなく、聖霊の内的証明によって確立される、と考えた。

このように歴代のキリスト教学者を二つに分けて論ずることは、信仰(神学を含む)の体質の傾向性を大雑把に表している、とは言えるかもしれない。しかし、一つの問題意識を視点にして、それ程単純に彼らの信仰を二分化できるようには思えない。実際には、18 世紀までの教会史は、聖書の権威の性質と範囲がどのようなものだったかという点については、意識してこなかった。意識されなかったものを二分化することには、無理がある。

従って、ロジャースがしたように、無誤性の主張者もまた、自分たちの主張と合致するところを探し出し、18 世紀までの教会史を自分たちの味方にすることができる。この種の論争においては、自分と同じ意見や人物を重視するだけでは、説得力はない。違った考えをもつ人々の意見に真摯に耳を傾け、出された一つ一つの反論に誠実に論破することが肝要である。

5. 無誤性ではなく、より的確な言葉を求めて

教会は長い間、聖書の権威を主張するために「無謬性(infallibility)」という言葉を使ってきた。ところが、その言葉では不十分だと考える福音派の一部の人々は、無誤性(inerrancy)という言葉を使うべきだと言い始めた。1960 年前後のことである。すると、「聖書の現象」という問題が指摘され、無誤性という言葉を使うことの是非が論じられるようになった。その結果、福音派のある人々は、聖書の霊感と権威を認め、「無謬性(infallibility)」を告白するが、無誤性(inerrancy)という用語の使用には、躊躇するようになった。この傾向は、今後ますます増大していくことになろう。その理由としては、以下のようなことがあげられる。

①この用語は、聖書の証言から直接導き出すことはできない。
②この用語は、聖書全体の目的や意図から目をそらさせ、記述の正確性に目をとめさせてしまう。
③この用語は、素朴な合理的聖書解釈と結びつき、現代の聖書学を否定する態度と結びついている。
④この用語は、原典と結びつけて論じられ、翻訳聖書の有効性や価値を弱めてしまう。
⑤この用語は、歴史的記録や神学的・論理的教えには有効でも、感情に直接訴えることばには使いにくい。
⑥この用語は、福音主義者を分断する論争の精神と結びつき、異端尋問的なニュアンスと結びついている。
⑦この用語は、多くの但し書きをつけねばならないので、論議を不正直なものにしてしまう。

無誤性という言葉には、上記のような問題がある。それゆえ、使うことをためらう人々が現われたとしても、当然である。しかし一方では、この言葉を使わないと、ドミノ理論的に、聖書の権威が崩されていくのでないかと危機感をもつ人々もいる。そのような人たちは、いろいろ問題はあるが、「無誤性」という言葉を使い続けることが大切だと主張する。

シカゴ声明は、無謬性は「誤って導いたり、導かれたりすることがない性質」であり、無誤性は「あらゆる虚偽や

誤ちを免れている性質」として、「無謬性と無誤性は区別してもよいが分離することはできない」と定義し、無誤性という用語を使い続けることを主張している。
しかし、違った意見もある。語源的には、不可謬性のラテン語 infallibitas は「欺かない」あるいは「欺かれない」の意味であり、他方、無誤性の inerrantia は、「道徳、霊的なことがらなどすべての種類の誤りから免れている」の意味だと考える人たちもいる。さらに、「無誤性」を歴史や科学などを含めた全領域において誤りがないという意味に、「無謬性」を信仰と生活、あるいは、啓示的領域においてのみ誤りがない、と区別する人たちもいる。

無誤性（inerrancy）と無謬性（infallibility）を区別し、無謬性は OK だが、無誤性は NO という福音派の学者は、かなり増えている。また、無謬性（infallibility）は誤解されやすいので、「不可謬性」という訳語をあてた方がよい、と主張する学者も増えている。「不可謬性」と訳せば、神は誤ることができないというニュアンスが強くなり、より信仰告白的な要素が強くなる。無誤性という用語には、どうしても書かれた形式に目を留めさせてしまう傾向があり、誤りがないことを証明しなければならなくなる。不可謬性は、聖書のメッセージに耳を傾けさせる利点をもっている。

さらにまた、ある学者たちは、聖書の権威を強調するため、より積極的な表現として「信頼できる（trustworthy）」、「確実である（reliability）」、「真理である（truthfulness）」、「欺かない（indeceivability）」という言葉を提唱している。アメリカのキリスト改革派教会の研究委員会レポートは、信頼できること（trustworthiness）は無謬性（infallibility）の同義語だと主張している。
「信頼できる」、「確実である」、「真理である」という用語は、「無誤性」より積極的な内容を伝えている。聖書の権威を主張するには、はるかに印象が好い。聖書もまた、そのような表現を数多く用いている（詩 119:43、86、138、142、151、160、170、ヨハネ 17:17、Ⅰテモ 1:15、Ⅱテモ 2:11、15、テト 1:9 等）。聖書の霊感の性格を規定する用語としては、否定的なイメージを発信してしまう「無誤性」より、肯定的なメッセージを発信する言葉の方がよりよいことは論を待たない。

Ⅳ. 聖書の正しい読み方

この講演は「聖書の正しい理解を求めて」というテーマで話している。サブタイトルを、「聖書が神の言葉であるとはどういう意味か」とさせていただいた。一章では、キリスト者の信仰の歩みの中で聖書がどのような位置を占めるのがよいのか、という問題を考えた。二章では、聖書は聖霊の霊感によって著され、権威ある神のみ言葉であることを学んだ。そして三章では、神の権威をもつ聖書には、誤りがないのかという問題に迫った。さて、いよいよ最終章である。この四章では、神の言葉である聖書をどのように読んだらよいのか、という問題を扱いたい。

私には、大きな痛みがある。聖書が神のみ言葉として、敬意が払われていないことである。聖書を自分勝手に解釈し、自分に都合よく利用しているクリスチャンが、なんと多いことか。聖書を研究しながら、単に知的な遊戯をしている人々が少なくない。否、もっと悲しいことがある、フーポン信者の存在である。日曜の朝、教会に行く前に聖書を探す。大騒ぎの末やっと見つけ、フーと息を吹きかけ、ポンと叩いてほこりを落とす。そしてあわてて礼拝に駆け込む。そんな話をある所でしたら、私はフーポン信者ではありません、アイフォンで読んでいますから、と言われた。礼拝には聖書を持っていきません、スクリーンに出ますから、と言った人もいる。私の冗談も、完全に時代遅れになっていることを知った。

冗談はともかく、聖書に親しんでいただきたい。神は、聖霊の霊感によって聖書を書かせた。そして、その聖霊は今、聖書をとおしてキリスト者に語っている。聖書以外のものをとおして神が語られることはあるのか、それは私には分からない。だが、聖書をとおし、神は今も語り続けておられる。そのことは確かである。そのすばらしい経験を味わっていただきたい。どれだけ聖書論を論じても、聖書によって生かされ、聖書によって歩んでいるのでなければ、その学びは本当に空しい。

1. 聖書は正しく解釈されねばならない

解釈の問題は、どのような文書の場合でも厄介である。聖書も例外ではない。聖書は神の霊によって記された。従って、絶対的権威を帯びている。しかし、その記述においては、相対的な人間が用いられた。従って、読む人の解釈作業が求められる。聖書は、神の御霊による助け、信仰の体験、そして贖われた理性に基づいて解釈されるとき、神の意図された意味が正しく把握される。しかも、どのような解釈であれ、それは絶対的なものではない。

解釈する人が相対的なのだから。聖書の絶対性と解釈の相対性、この両者を認めるところから始めるのがよい。

聖書の解釈とは、第一義的には聖書記者の意図を正しく汲み取ることにある。しかし、聖書の場合は、最終的には、聖書記者の言いたいことを知るために聖書を読んでいるわけではない。記者に霊感を与えて聖書を書かせた、その聖書の神が言わんとしていることを聴くために聖書を読むのだ。
聖書は、正しく解釈されなければならない。あたりまえのことである。問題は、どうすれば正しい解釈ができるのか、ということにある。以下、六つの点を挙げておく。

まず、旧約であれ新約であれ、できる限り聖書記者のことをよく知ることである。記者のことが何も分からなくても、書物の言いたいことは分かる。それが普通である。だが、記者のことが分かると、記者が述べていることにより親しみを覚え、分かりやすくなる。神は、記者を選び、記者のもつ性質、特質、能力、経験、立場、信仰、職業など、その人らしさのすべてを用いて聖書を書かせた。もし著者が資料を使っている場合には、その資料に関する情報も集めるとよい。

二番目に、聖書の記者たちが書物を書いたときの読者のことを知ることである。記者はそれぞれ、ある人々を念頭に置いて聖書をまとめたはずである。彼ら読者が理解できる言語で、彼らが継承してきた文化的遺産の中で、彼らにとってピッタリくる表現技法を用いて記したはずである。それらは、時代によって、場所によって、置かれた状況によって、あるいは扱われているテーマによって異なるはずである。最初の読者になったつもりで、彼らの思考様式の中に自らを置くと、今まで気づかなかったことが見えてくる。
今日のキリスト者は、現代人がもつ歴史認識や科学的知識、宗教的・文化的な意識を、聖書解釈に持ち込み過ぎる。あるいは、教会史上の人物の解釈に言及し過ぎるきらいがある。あるいは、現代的な例えや話での解説が多すぎる。むろん、説教や講演をする場合には、やむを得ない。だが、聖書が本来言おうとすることを把握するには、そういうものは一切不要である。聖書の世界に飛び込むことである。

三番目に、聖書をより正確に、より豊かに解釈するには、聖書の言語を知らなければならない。旧約聖書はイスラエルの民に対して書かれた。使われた言語は、ヘブル語（一部アラム語）である。ところがほとんどのキリスト者は、ヘブル語が読めるわけではないから、日本語訳を読む。できれば、いくつかの翻訳された聖書を比較しながら読むと、言語のもつニュアンスに近づくことができる。辞書や辞典類、註解書なども参考にするとよい。
例えば、ヘブル語の「ヘセド」という単語は、「民の不誠実さを超え、永遠に貫かれている神の契約の愛」を指す。ところが日本人は、聖書の神との宗教体験を味わってこなかったので、この種の愛を知らない。従って、それに対応する日本語はない。参考図書で補う以外にない。

四番目に、著者や読者が生きていた文化を知らねばならない。言葉を理解することは簡単ではない。なぜなら、その背後にある文化を理解せねばならないからである。だが、文化を理解することは、さらに難しい。聖書の文化は、イスラエルの文化である。それは、古代中近東（シュメール、アッカド、ウガリット、アッシリヤ、バビロニヤ）やエジプトなど、広い文化圏で育まれた文化である。それは、現代の日本文化とは似ても似つかないものである。
例えば、サラは「非常に美しい」と言われている（創世記 12:14）。この箇所を読む度に、神学校のクラスを思い出す。学生たちは、「美しい」という言葉は 65 歳の女性にでも使われるだろうかと、大真面目に議論していた。65 歳でも美しい人はたくさんいるとか、神を信じる人はいつまでも若々しい、などという意見が飛び交っていた。ヘブル語の「トーブ（美しい）」は、必ずしも容姿のことを言っているわけではない。富裕で高貴な人を指すということで、一件落着ということになった。ただその時、言葉はその時代によって、ずいぶん意味が違うことを学んだ。

我々は、感情は心にあると感じている。ところが古代イスラエルでは、感情は内臓に宿っていると考えられていた。だから、直訳すると違和感の生じるケースも多々ある。結婚という概念も、古代中近東の世界と、現代の日本社会とは、大きな違いがある。同じ日本であっても、昔と今ではずいぶん違う。もし現代の日本人の感覚で聖書を読むと、聖書の世界を知るというより、聖書に自分の考えを読み込みながら読む、ということになる。

五番目に、文学類型（ジャンル）という問題を踏まえて、聖書解釈に取り組まねばならない。聖書が文書という形を取っている限り、何らかの文学的なジャンルの中で記されている。旧約聖書であれば、歴史、詩歌、格言、法律、賛美、説教、恋愛歌、預言、祭儀文書、典礼文書、系図、契約文と、いろいろである。歴史と一口に言っても、列王記と歴代誌の書き方はずいぶん違う。モーセが、創世記と出エジプト記の両方を書いたとしても、ずいぶん違っ

た性質の文書になる。創世記は伝えられた資料を基にしてまとめたものであるが、出エジプト記は、実体験をもとに、日記やメモなどの資料に基づいて書いたものである。新約聖書であれば、福音書があり、使徒の働きのような歴史書がある。さまざまな手紙があり、黙示文学的な書物もある。

すべての文書は、文学類型を考慮して解釈せねばならない。言葉の意味やニュアンスは、文学類型によって違う。同じ言葉が使われたとしても、散文体で書かれた叙述文と、詩文体で書かれた詩や格言とでは異なる。律法の文章と詩の文章を同一視することはできない。詩や格言、脚本などの中に歴史の正確な表現を求めるような愚かなことはしない。預言書と歴史書を同一視することもできない。黙示文学を字義どおりに解釈することは、間違った歴史観を形成することになる。

六番目に、聖書全体の啓示の流れを踏まえて読まねばならない。神の啓示は、斬進的である。つまり、御心は一度にすべてが示されたのではなく、徐々に徐々に開示された。新約の光で旧約聖書を読むことは、とても大切なことである。旧約聖書のメシヤの到来の預言は、新約聖書において成就している。神の解放のわざは、出エジプト、バビロン解放、キリストの救いへと発展している。律法は福音への養育係である。アブラハムの子孫はユダヤ人ではなく、教会である。旧約のイスラエルはキリストの神の国のひな型である。山上の説教でイエスは、旧約聖書の倫理を更新している。

高校生時代、スコーフィールドの注釈つき聖書を使って、Hi-BA のスタッフよりディスペンセーショナルな聖書解釈を学んだ。聖書はすべて文字どおりに解釈されなければならない。宇宙の創造は紀元前 4,004 年であり、千年王国前再臨説が正しい。人類に対する神の取り扱い方法は、歴史の流れの中で違っている。それは、堕落以前、堕落以降からノアまで、ノアからアブラハムまで、アブラハムからモーセまで、モーセからイエスまで、イエスからイエスの再臨の時まで、千年王国時代の七つの時代に分けられる。旧約聖書の預言はすべて文字どおりに成就する。いまだ実現していない預言は、千年王国時代にすべて成就する、こんな学びだった。

皆さんも、この種の聖書理解をどこかでお聞きになったのではないかと思う。最近は、これほど極端な字義どおりの解釈は少なくなった。だが、福音派の聖書解釈はこのグループの影響を深く受けている。何でもかんでも文字どおりというのは、さすがにおかしい。だが、聖書が書かれた時代の読者を意識し、その文化的な枠組みを受け入れ、聖書を文字どおりに解釈することは基本的に正しい。すべてを文字どおりに解釈して認知的不協和が起こったら、その聖書箇所を神学的に考察し直し、不協和を解消する方向で解釈するのが一番良い。

七番目に、聖霊の働きの下で、デボーショナルに聖書を読むことこそ重要だ、ということである。聖書の本当の読み方は、ここにある。しかし、この点に入る前に、聖書解釈において大切な二つのことにふれておきたい。一つは、聖書時代の文化圏を意識して読むことである。もう一つは聖書批評学をどう考えるかということである。被造物管理の神学に立って聖書を読むということは、この二つを踏まえてデボーショナルに読むことである。

2. 聖書時代の文化圏を意識して読む

聖書は、神が選ばれた記者をとおし、特定の時代の、特定の場所の、特定の人々に対して（to）啓示された神の言葉である。しかしその啓示は、いつの時代であれ、どこに住む人であれ、すべての人に向かって（for）語りかけている神の言葉である。従って、直接の対象として書かれたわけではない読者は、神が意図されたことを読み取るために、聖書が書かれたときの文化的背景を知らねばならない。

古代の文化的背景を理解するには、その当時の文献を読まねばならない。文献が古代の文化の窓となるからである。19 世紀以前は、聖書の歴史的背景を明らかにする文献は、ほとんど手にすることはできなかった。しかし、過去百年の学問的成果には驚くべきものがある。現在では、誰でもが、これらの文明の文献を自由に読むことができる。ありがたい時代である。

古代メソポタミアの文明は、紀元前 5000 年頃にはかなり栄えていた。以来、シュメール、アッカド、ウガリット、アッシリヤ、バビロンと、いろいろな都市国家を中心に、文明は栄えた。その古代中近東の文明は、古代エジプトの文明とは多くの点で異なっていた。神の民イスラエルの定住地となったカナン地方~~に~~は、古代中近東の一角を占めていたが、これらの文明とは一味違った特色をもっていた。

新約聖書の時代になると、はるかにインターナショナルな世界に発展していた。イエス時代のパレスチナ社会と、パウロが活躍するギリシャ・ローマ世界とは、その文化的様相は相当異なっていた。一般的な言い方をすれば、新約時代の歴史資料は、旧約時代に比べ、はるかに豊富で、役立つものが多い。そこから、文化的背景を読み取ることができるようになったため、新約聖書の理解は、旧約聖書よりはるかに進んだものになっている。扱う期間が短いということもあり、最近では学者間で対立している事項は、ほとんどなくなってきていると言ってもよい。

聖書は、旧約聖書であれ新約聖書であれ、まず書かれた時代の文化圏に生きる人々に読まれる目的で書かれた。彼らの文化や宗教的な世界から抜け出て、聖書の神の世界に生きるようにと招いているのが聖書である。聖書は、そのような目的で啓示された。とすれば、聖書記者は、当時の文化に生きる人々にとって有効なコミュニケーターだったはずである。神の啓示は、書かれた時代の言語や文化をとおしてもたらされた。と同時に、その文化や宗教から脱却させる目的で与えられた。この二重性を踏まえて聖書を読むなら、神の意図されたメッセージが、より豊かに響いてくるはずである。

では、どのような共通事項があり、どのような点からの脱却を求めているのか。そのことを知るには、一次資料そのものを読むのがよい。新約聖書に関していえば、ユダヤ教のタルムード、ヨセフス、フィロン、ギリシャ教父などの資料が役立つ。旧約聖書では、古代中近東（シュメール、アッカド、ウガリット、バビロニヤなど）および古代エジプトの文献に近づくことである。

今から 50 年ほど前は、日本語で読める資料はごくわずかだった。関連言語を学ばない限り、手も足も出なかった（英語であれば、かなり翻訳されていたが）。でも今はいい時代になった。およその意味をつかむという程度であれば、日本語でもかなり多くの参考文献が手に入る。私の手元には、以下のような書物がある。いずれも、ごく最近、インターネットで簡単に購入したものばかりである。先入観や偏見をもたず、古代中近東の人々が何を考え、どんな宗教的状況の中で生きていたのかを考えてみるとよい。

岸本通夫著他『古代オリエント』（河出書房新社、1989 年）
吉川守編『NHK大英博物館Ⅰ　メソポタミア・文明の誕生』（日本放送出版協会、1990 年）
M・ローフ著、松谷敏雄監訳『古代メソポタミア』（朝倉書店、1994 年）
月本昭男訳『ギルガメシュ叙事詩』（岩波書店、1996 年）
矢島文夫訳『ギルガメシュ叙事詩』（筑摩書房、1998 年）
P・アイゼレ著、片岡哲史訳『バビロニア』（アリアドネ企画、1998 年）
大貫良夫著他『人類の起源と古代オリエント』（中央公論社、1998 年）
J・ポテロ著、松島英子訳『メソポタミア―文学・理性・神々』（法政大学出版局、1998 年）
前川哲也著他『歴史学の現在―古代オリエント』（山川出版社、2000 年）
松島英子著『メソポタミアの神像』（角川叢書、2001 年）
中田一郎訳『ハンムラビ法典』（リトン、2002 年）
日本オリエント学会編『古代オリエント事典』（岩波書店、2004 年）
小林登志子著『シュメル―人類最古の文明』（中公新書、2005 年）
小山茂樹著『中東がわかる古代オリエントの物語』（NHK出版、2006 年）
中田一郎著『メソポタミア文明入門』（岩波書店、2007 年）
ジャン・ポッテロ著、松本健監修『バビロニア　われらの文明の始まり』（創元社、2007 年）
岡田明子、小林登志子著『シュメル神話の世界』（中公新書、2008 年）
青木健著『古代オリエントの宗教』（講談社、2012 年）

もし英語が読めるなら、インターネットでさまざまな情報を手にすることができる。例えば、古代シュメールの文献であれば、The Electronic Text Corpus of Sumerian Luterature (http://etcsl.orinst.ox.ac.uk/) のホームページを訪ねれば、最新の情報を手にすることができる。

これらの古代中近東の文献には、それぞれが伝えたいメッセージが記されている。それを読み取ることはさほど難しくはない。我々は、専門家になるわけではない。だから、どの書物でもよい。一冊か二冊を図書館から借り、気楽に読んでいただきたい。もしあなたがキリスト者であるなら、それが聖書とはいかにかけ離れたメッセージを発信しているかを知って、驚くに違いない。本当にそのとおりなのだ。にもかかわらず、何となく似ているところも発見するだろう。そういう読み比べをとおし、聖書が伝えようとするメッセージがより鮮明になってくる。それこそが、聖書

記者が同時代の衣をまとわせながら、同胞の民に伝えようとした神のみ心だったのである。

キリスト者はときどき、現代的なセンスで聖書を読むことにより、聖書時代の人々にとっては全く意識されなかった問題をつくり出してしまうことがある。創世記 1 章を現代科学や歴史の観点から読んでしまうのは、その典型的な実例といえよう。そのような間違いを避けるには、普段から、聖書時代の人々の生活や文化風土、宗教的環境やさまざまな伝承にふれておくのが一番である。ここで、古代中近東の文献をとおし、神の民イスラエルを取り囲んでいた文化圏を、ちょっとだけ紹介しておこう。

例えば、紀元前1200年ごろのバビロニヤの創造詩エヌマ・エリシュ(マルドゥク神のこと)である。この文書は、バビロニヤのアキツ神殿における新年祭で毎年読まれたものである。この創造物語では、まず神々が創造され、その神々の中に戦いが生じる。その結果、マルドゥク神が反抗する神々を破って宇宙を統括する。造られた神々は、年に一度の神殿における新年祭で、この世界のさまざまな領域の支配を分担する。
ここには、聖書の世界に関連するヒントがいくつかある。七日間による創造、統治領域の分担、世界は深く暗いやみで水のようなものから始まったこと、大空によって三つの世界に分けられていること(天の世界、地上、地下の世界)などである。このような共通事項は、聖書と古代文献の間に依存関係が認められるというほど、大きなものではない。同時代の人々であれば、誰でもが常識的にそう考えていただろうと思える程度の類似である。

古代メソポタミアの文献ではいずれも、まず神々の誕生が問題にされた。その神々は、戦いを経て序列が形成され、その結果、世界に見られるさまざまな機能を担当していく。古代中近東の最古の都市の一つエリドゥ市からの文書では、エンギ神が主神を演じている。宗教的に中心都市ニップル市の神殿からの文書では、エンリル神が重要な役割を果たしている。
また、水が最初に存在し、そこから神々が誕生するという話も、いろいろな文献が伝えている。それらの文献によれば、雨が降ってくると天の水を留めていたものの一部が開門され、どこかで水が湧き出てくると水門が開かれた、と考えられた。世界のさまざまな現象の背後には、それを操作している神々がいると信じられていたのである。彼らにとっては、世界の現象より、その現象を司っている神々の方が重要だった。その神々の誕生と世界支配の役割分担、それこそ古代中近東の創造物語の核心だった。

ウガリットの文献についても、同じようなことが言える。メソポタミア地方の西方、イスラエル北方のレヴァントから出土した、出エジプトの頃の粘土板がある。この神話は、宇宙論を直接論じたものではないが、当時の世界観をよく示している。そこでは、バアルは雨の神で、肥沃をもたらす神だった。バアル神は海の神ヤムとの戦いで勝利を治め、ヤムの統治を海に限定させた。バアル神はこの地の支配者になり、パンテオンの主神エルに王宮の建設を願い出て、かなえられた。バアル神には、三人の娘がいた。その三人の神々それぞれに、三つの世界を治めさせた。最初の娘ピッドレイ神には光の世界を、二番目の娘タレイ神には空の水の世界を、三番目の娘アルセイ神には地と野菜、それから生き物と人間の世界を治めさせた。これは、創世記 1 章の一日目の「光」、二日目の「雨」、三日目の「地」に対応している。興味深い。

では、エジプトの文献ではどうか。
最近20年ぐらいの間に、古代中近東の文献と共にエジプトの文献と創世記1章の世界創造の記述との類似性についての研究が進んでいる。ちょっとしたリバイバルブームの感さえある。エジプトの文書では、世界は深く、暗い底なしの淵から創造される。しかも、神アムンの息がそのやみの淵を覆っている。このような記述は、創世記1章2 節の「神の霊」を思い出させる。太陽神を重視するエジプトでは、やみは重要な位置を占めていた。そのエジプトにおいても、光は太陽より先に造られている。創世記 1 章の記述と同じである。

いくつかの類似性を指摘し、エジプトの創世神話と創世記 1 章の創造記事との間に依存関係があったと推測する学者もいる。しかし、直接の依存関係を認めるほど、類似性は高くない。むしろ、創世記 1 章をエジプトの文化圏の文脈で読むと、聖書が伝えたいことが鮮明になってくる。エジプトでは、神々の誕生物語が中心であるが、聖書は、唯一の神が世界のすべてを創造した、というメッセージを強調している。

エジプトやメソポタミアの文献において共通しているのは、世界を造る神々が世界と共に創造されていくという話である。そこでは、「区別する」ことや「名をつける」ことが重要だった。創造とは、すべてのものに名前を付けることでもあった。ところが聖書は、神をこの世界の外に置いている。そしてその神が、すべてを創造したと教えている。

そのメッセージこそ、古代中近東やエジプトの人々が受け取らねばならないメッセージだった。

我々は、最初の聖書の読者の環境をよく理解し、彼らがどのように読んだかを踏まえる必要がある。メソポタミアからの並行的な資料を合わせて読むと、創世記 1 章を理解しやすいことがたくさんある。メソポタミアの文献には、想像力に富んだシンボル的な表現がふんだんに出てくるが、当時の人々は皆、実際に起きた出来事として読んだはずである。そういう文化的な背景に生きる人々が、創世記 1 章の読者でもあったことを忘れてはならない。
我々が日常生活で体験している世界は、古代中近東の人々のそれとさほど違わない。毎日の生活では、ビッグバンやアインシュタインの相対性理論は出てこない。ニュートンや、ガリレオの世界でさえない。地球は平らで、天動説的な感覚で生きていて、何の不便も感じない。人間は、いつの時代の人も、ごく普通のセンスで生活している。これを常識的実在論とでも呼ぼうか。常識的現象論でもよい。そんな言葉があるかどうか分からないが、なければ、つくって考えたらよい。

聖書は、我々現代人を意識して書かれたものではない。著者が念頭に置いていた読者とは、彼と同時代の人々だった。著者は、彼らが分かるように書いたのである。それは、常識的な実在論であり、常識的な現象論の世界だった。
私は、先の二回の創世記 1 章に関する講演で、次のように述べた。一日目は、光によって神の働きが見え、昼と夜の区別ができるようになった。これによって人は、時間の概念や神の活動を理解するようになった。二日目には大空が用意された。これで人間にとって大切な天候の準備ができた。三日目には、地上に食物の準備が整った。こうして、人間生存にふさわしい環境は着々と整えられていった。四日目以降は、天体、空の鳥と海の魚、そして動物や人間を登場させている。このようなフレームと、すべての流れを導かれたのは、イスラエルと安息日の契約を結ばれた唯一の神である。このようなメッセージこそ、創世記 1 章が伝えたかったものだった、と。

古代中近東の文化圏に生きていたイスラエルの民は、彼らの思考レベルで、この創世記 1 章のメッセージを受け取った。しかし神は、あらゆる時代に生きる神の民に、この神のメッセージを伝えようと願っている。それぞれの時代に生きる神の民は、それぞれ皆、自分の文化的な背景の中で生きている。ということは、どのような聖書箇所であっても、自分の文化的な衣を着ながら、書かれた時代の衣をまとった神のみ声を聞かざるを得ない、ということである。「ユダヤ人にはユダヤ人のように、ギリシャ人にはギリシャ人のように」（Ⅰコリント 9:19-23 参照）なって、聖書に向かうことが求められているのである。

3. 聖書批評学を考慮して読む

もう一つの問題に進もう。皆さんは、聖書批評学という言葉をお聞きになったことがあるだろうか。たぶん、はじめて耳にする方も多いのではないかと思う。また、たとえ聞いたことがあっても、中身までは知らない、という方がほとんどだろう。福音派の聖書研究書、説教集、霊的な読み物を読んでいる限り、この種の問題にふれることは、まずない。そういう学問は、不信仰な人々のすることだと、長い間思われてきたからである。

この学問は、18 世紀も後半、聖書はイスラエル民族の神体験から生み出されたものだと考える人たちによって始められた。彼らは、神や奇跡、超自然的なものを一切排除し、理性で割り切れる合理的なもののみを真理と考えた。その結果、旧約聖書や新約聖書の福音書ががどのような資料を基にして今日のような信仰に形成されたのかというプロセスの解明から始まった。従って、20 世紀以前の聖書批評学は、「資料批評」の学問と見なされた。

20 世紀になると、批評学は、そのような資料を生み出した共同体の生活様式（学者の間では、これを「生活の座（Sitz im Leben）」と呼んでいる）に目をとめるようになった。その共同体が生み出す文書の様式が衆目され、「様式史批評」と呼ばれるようになった。例えば、イエスがガリラヤ湖の嵐を鎮めたという記録（マルコ 6:45-52）がある。批評学者は、この記録が実際に起こったかどうかを問題にしない。こういうキリストのストーリーを生み出した教会の信仰こそが重要だと考えた。この記録では、舟は教会を表し、風はこの世からの迫害を意味した。イエスは、迫害の真ん中にある教会に「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」と語りかけた。この出来事を生み出した共同体の信仰こそ重要なのだ、と説明されるようになった。

20 世紀も後半になると、この「様式史批評」はさらに「編集史批評」へと発展した。例えば、マタイの福音書の編集者マタイは、どのような意図や見通しをもって福音書を編集したのかという点に、関心が集まったのである。当

時、マタイの神学とか、ルカの神学などという言葉が流行った。各書物の編集者の意図や神学を探ろうとする動きは、福音書に始まったが、またたく間に旧約各書にまで及んだ。

聖書批評学は、編集史をもって完成したかに見えた。だが、80 年代に入ると、英文学の世界の学者たちから、聖書を物語的に（narative）読む方法が提唱され始めた。その読み方は、90 年代には聖書批評学を専門とする学者たちの間で脚光を浴びるようになった。それまで彼らは、①聖書を救済史的に理解する、②聖書を神の御業を証言しているものとして読む、③聖書全体を正典的に解釈する、という三つの重要な問題を論じていた。そのような問題意識が、文学書の分析方法論に融合され、統合されるようになったのである。つまり、「編集史批評」が「物語批評」として集大成していくのである。つまり、聖書を歴史書と読むより、神がご自身の贖いの御業を物語的に書かれた書物と、捉えるようになったのである。

福音派の学者たちは、資料批評から様式史批評に至るまでは、聖書批評学に懐疑的だった。しかし、編集史批評から物語批評に移行するにつれ、積極的に評価し、関わるようになっていく。むろん、批評学の成果は、玉石混交であり、どのような結論であっても、コンセンサスがあるとはいえない。評価もいろいろ分かれる。判断基準もあいまいだし、仮説の上に仮説を立てて論じていることも少なくない。循環論法に陥っているケースも目立つ。これらのことを踏まえた上で、現代の聖書批評学が到達している「聖書各書の緒論的な問題（資料批評）に関する結論」を紹介しておく必要があろう。福音派のキリスト者であっても、聖書を「神の物語」として読むことに対し、知らぬ、存ぜぬを通すわけにはいかなくなっているからである。

聖書批評学は、モーセ五書の資料分析に始まった。19 世紀初頭までは、モーセが創世記から申命記までのすべてを書いた、と信じられていた。しかし、ドイツのユリウス・ヴェルハウゼン（1844～1918 年）は、そのような考えに疑問を抱き、モーセ五書が現在の形態になるまでには、いろいろな資料が存在し、編集過程があったと考えた。その結果、現代の批評学では、五書については次のように考えるのが一般的になっている。

モーセ五書は、四つの資料から成り立っている。J資料は「ヤハウエ」の神名を使っている。それは、南ユダにおいて、王国分裂時代（前 922 年から 722 年の間）に記された。同じ頃、北イスラエルでは、「エロヒーム」という神名を使った E 資料がつくられた。E資料は、J資料と同じ出来事をカバーしている。だが、神がモーセにヤハウエという名前を知らせる前（出エジプト 3:15、6:3）は、誰もヤハウエを知らなかった、そういう前提で書いている。

前 722 年以降、この二つの資料をまとめてイスラエル史を書いた人が現われた。その人のことをJ資料とE資料の編集者Rという。このJ資料とE資料の歴史とは違うイスラエルの歴史を、エルサレムの祭司P（Priest）が書いた。これをP資料という。P資料の話は、J資料およびE資料と重なるところがあった。ただし、神の名前が出てくるところでは、E資料に同意していた。

最後の資料はD（Deuteronomy）である。この資料には、申命記的な歴史の書物（申命記、ヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記）が含まれていた。このD資料には、J資料とかE資料と同時代、あるいはそれより古い資料も含まれていた。最終的には、ユダのヨシュア王の時代（前 622 年ごろまで）に、一つの書物にまとめられた。その後、もう少し長いものに改定され、前 587 年のエルサレム陥落ぐらいまでが含まれるものに拡大された。

その後、これらのすべての資料を編集する人が現われた。

歴史書に関しては、既に述べた D 資料に加え、ルツ記が 5 世紀ごろに加えられた。歴代誌は神殿礼拝の観点から書かれたイスラエル史で、6 世紀頃のものと考えられている。

ヨブ記は、アブラハム時代に生きたヨブという人物をモデルにした対話劇の脚本で、6 世紀後半につくられたと考えられている。詩篇は、神殿礼拝における賛美を中心に、最終的には 5 世紀頃まとめられた。箴言、伝道者の書、雅歌などは知恵文学と言われ、捕囚から解放されてからの文書と考えられている。

イザヤ書は、語られている預言の歴史的な背景が違うとして、1-39 章までと（前 8 世紀）、40-55 章（前 540 年頃）、56-66 章（前 500 年前後）までの三つに分けられる。ダニエル書の 2 世紀頃の詳細な歴史描写は預言とは考えにくいとして、2 世紀ごろの著作とされている。

新約聖書について言えば、共観福音書は、マルコの福音書が最初で 60 年前後に書かれた。次にマタイの福音書は、そのマルコの福音書に M という資料を合わせて、編集された。ルカの福音書も同様に、マルコの福音書に L という資料を合わせて、編集された。年代は両方とも、エルサレム神殿が崩壊した 70 年直後だろう。ヨハネの

福音書は 100 年ごろの著作で、著者は使徒ヨハネではない。

エペソ人への手紙やコロサイ人への手紙については、パウロの著作性は疑われ、パウロより少し後の時代のものとされる。テモテやテトスへの手紙など牧会書簡は、背景となっている教会の姿から、一世紀終わりから二世紀前半のものとされる。ヘブル人への手紙はパウロのものではなく、80 年頃に記された。ヤコブの手紙、ペテロの手紙、ヨハネの手紙などは、一世紀終わり頃から二世紀初めの手紙であろう。これらは皆、使徒の名前がつけられているが、それは使徒の権威で公刊されたという意味であって、直筆ではない、とされる。ヨハネの黙示録は、一世紀の終わりの著作であろうが、使徒ヨハネが著者ではない。

このような聖書批評学に対し、福音派に属するキリスト者はどのように考えたらよいのか。五つのことを述べておきたいと思う。

第一に、批評学者の研究、問題解決の仮説を批判的に検討すべきである。これまで福音派は、前提が間違っていれば、方法論や結論も間違っていると断定してきた。この判断には、ある種の真理がある。学問方法論（特に聖書学のような分野では）は、その前提に大きく左右される。奇跡を信じない人にとっては、出エジプト記の出来事のほとんどは史実ではないことになる。預言を信じない批評学者にとっては、ダニエル書が紀元前 2 世紀以前に書かれた可能性は、初めからない。聖書の神を信じない限り、バビロン捕囚も、そこからの解放も、単なる歴史の出来事に過ぎない。神の民イスラエルの歴史観は、すべてが幻想に過ぎない。

しかし、そういう前提に基づくとしても、批評学のすべてが間違っている、真理ではない、と断罪すべきではない。信仰的立場からは見落としてしまうことで、学問的にものを考えるときに気づくことはたくさんある。それらは、キリスト者が誠意をもって考えるべき課題である。

第二に、聖書批評学が提起している問題を正しく認識することである。批評学はもともと、聖書の啓示的側面を無視し、聖書は古代の他の文献と基本的に変わらない、そういう前提に立って始まった。従って、合理的精神と科学的研究方法ですべてを割り切った。その結果、キリスト信仰に、教会の教理に、キリスト者の神学に大きな破壊的作業を及ぼした。

そういう側面が確かにある。しかし、批評学は聖書の成り立ちをできる限り正確に理解したいという思いから出発している。聖書は、天から降って来たわけではなく、神によって記者が用いられ、記された。そういう人間の側面は確かに存在した。批評学が問題にしていることは、キリスト者にとっても取り組まねばならない事柄であって、聞くべきたくさんの事柄が含まれていた。キリスト者は、彼らの問題提起を真剣に受けとめず、悪魔のささやきと無視することもできる。もしそうするなら、我々は、知的にものを考える人々への宣教の道を閉ざすことになる。そしてさらに、若き福音派の有能な学徒たちをキリスト信仰から遠ざけてしまうであろう。

第三に、批評学者たちが提起している課題に対し、聖書信仰という神学的ドグマから判断すべき問題かどうかを、慎重に見極めねばらない。キリストの処女降誕を初代教会の創作とする批評学や、キリストの奇跡を合理的に「生活の座」によって説明してしまうのは、いただけない。キリストの復活の史実性を疑うのも論外である。神の特別介入や奇跡などは最初からあり得ないとする立場を容認することはできない。それらは、キリスト者の信仰告白の内容であり、宣教の実質であって、信仰者にとって拠って立っているところである。

しかし、五書の著者がモーセかどうかは、別の問題である。新約聖書の言及を著者問題への解答に用いる従来の福音派の姿勢には、大きな違和感を覚える。主イエスがモーセについて言及されたとき、今日論じられている著者問題への解答を含めていたとは、到底考えられない。それは信仰の問題ではなく、知的学問に対するセンスの問題である。むろん、聖書信仰から逸脱することではないし、主イエスの権威を弱めるわけでもない。

四番目に、キリスト者の中には、批評学的方法論と成果が大きく変わってきたことに不信や批判を口にする人がいる。確かに、批評学は資料批評－様式史批評－編集史批評―物語批評へと発展してきた。変わったと言えば、変わったと言える。しかし、批評学は学問である。信仰ではない。従って、不変でないのは当たり前である。あてにならないと即断すべきものではない。批評学はあくまでも学問である。変化しているとは進歩していることである。特に最近の聖書学は、考古学や古代中近東の文献との比較研究によって、穏健かつ建徳的になりつつある。加えて、編集史から物語批評に軸足を移している点では、聖書信仰者が貢献できる部分は、以前にもまして大きくなっている。

最後に、福音派は、聖書信仰に立つ聖書学を構築し、それを広く世に公表する責任がある。これまで我々は、

「聖書の批評学にどう対処すべきか」というサイドから問題を考察してきた。しかし、そのような問題意識では、不充分かつ消極的に過ぎる。これでは、福音派の聖書学は聖書批評学の十年か二十年後を追いかけるだけとなる。そして福音派の信仰と矛盾しない部分だけをつまみ喰いし、利用するだけに終わってしまう。

聖書は人間をとおして与えられた神の啓示の書である。「人間をとおして」という点では、聖書信仰者は聖書批評学者と土俵―言うまでもなく全く同じではないが―を共にする。しかし、聖書はそれ以上の書物である。神が御自身の御旨を啓示された書である。我々は神の啓示という事実を視座に入れるとき、初めて聖書をトータルに把握し得る、と確信する。その意味で、聖書信仰者は、聖書を物語的に読むという「物語批評」に対しては、特別大きな貢献をすることができると、私自身は確信している（この点は、私の『マタイの福音書註解（上、中、下）』を読んでいただければお分かりいただけると思う）。神の恵みによって、我々キリスト者はこの「聖書信仰」の立場に導びかれた。とすれば、この立場に立つ聖書学を実際に構築し、この世に証詞することは、我々の責務である。

おわりに（本講演のまとめ）

聖書は、この世界に二冊とない特別な本である。聖霊をとおし、神が全人類にお与えになった書物である。神は、テモテへの手紙第二 3 章 15-17 節において、聖書を書いた目的を明らかにしている。この聖句は、「聖書の霊感」の項でふれたが、ここでもう一度、そのテキストを読み直してみよう。

> 聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。（Ⅱテモテ 3:15-1 7）

福音派は、19 世紀から 20 世紀にかけ、この聖句の重要性に注目し、聖書の霊感論を展開した。「神のことば」のすばらしさは、詩篇 119 篇をはじめ、イザヤ書 40-55 章などいろいろな個所で説き明かされている。しかし、聖書に関して論じるのに、この聖書箇所に勝るものはない。このテキストに基づき、聖書の霊感と権威とを確立したことは、全キリスト教界に果たした最大の貢献だった。

ただし、福音派によるこのテキストの用い方には、二つの致命的な欠陥があった。一つは、この聖句が何も述べていないことを付け加えたことにある。もう一つは、この聖句が明確に教えていることを大切に扱わなかった点である。付け加えたのは「誤りがない」という言葉で、それによって不毛な無誤性論争を生み出してしまった（これについては、三章の「無誤性論争」の項でふれた）。ここに福音派の悲劇があった。

もう一つの福音派の間違いは、聖書が記された目的を無視して聖書の霊感と権威を論じたことにある。このテキストは、聖書には二つの目的があったことを明らかにしている。一つは「キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせる」ことであり、もう一つは「神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となる」ためである。前者はキリスト者になることに関わっており、後者はキリスト者の生き方に関わっている。福音派は、すばらしい聖句に注目しながら、この二つの目的をきちんと押さえた「健全な聖書論」を展開できなかった。

はっきり言わせていただこう。まず、第一の目的の「キリスト・イエスに対する信仰による救い」に関してである。全キリスト教界は、聖書がキリストの救いをもたらす目的で記されたことを理解してきた。この点はとてもよかった。しかし問題は、その救いの中身である。キリストの救いを「イエスを信じるなら、死んでも天国に行くことができる」という、矮小化した理解に留まってしまった。「キリストの救い」によって、永遠のいのちが既に今の世においてキリスト者の内に始まり、日々の歩みがこのいのちに導かれていることを強調してこなかったのである。それだけではない。この永遠のいのちに生かされていることと聖霊の内住とは同義であること、それが神の家族の一員のしるしであり、そこにエキュメニズムの根拠があり、神の国の実現のすべてがそこにかかっていることなどは、今のキリスト教界では完全に無視されてしまっている。このような「キリストの救い」理解は、どう考えても「欠陥福音」と言わねばならない。

聖書が著わされたもう一つの目的は、「神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となる」ためである。この第二の目的についても、全キリスト教界は矮小化して理解してきた。「神の人」と「すべての良い働き」が何を意味しているのかについて、真剣に考えることをしてこなかったのである。

「神の人」とは、神に属する人、神が用いたもう人、あるいは神に仕える人のことである。文脈から言えば、キリストの救いにあずかった人であり、キリスト者のことである。ところが、「神の人」を「神に対して働く人」と解釈し、教役者を念頭に置くことが多い。そのように限定する必要は全くない。
さらに、「良い働き」を「宣教のわざ」と考える人がほとんどである。最近は、ホーリスティックな福音理解が叫ばれるようになった。すると、この「良い働き」にキリスト者の社会的責任を含めて解釈する人も出てくることだろう。だが、それでも不十分である。それは、「良い働き」という言葉に、「すべての」という形容句がついている。従って、宣教とか社会的責任などに限定すべきではない。

聖書が書かれた二つ目の目的を、教役者が福音宣教や社会的な責任を果たすために「十分に整えられた者となる」と解釈したなら、誰でも、それはどこかがおかしい、と申し立てるだろう。そんなふうに聖書の目的を理解している人はいないはずである。ここでいう「すべての良い働き」は、神がキリスト者に委ねられた被造物の管理責任を指していると考えない限り、この句の十分な理解には到達しない。しかり、聖書は、キリスト者が被造物管理の責任にふさわしく、十分に整えられた者となるために書かれた、ということになる。

では、それは、キリスト者の実際生活の中で、どのように実現していくのか。このことに対しはっきりイメージできないと、この聖句は実質的に意味のないものとなる。そこで、現代のキリスト者にとっては、毎朝のデボーションにおいて、聖書をとおして神からの御声を聞くことに、この聖句を理解する鍵があることを強く訴えたい。

キリスト者にとって、聖書を読む機会はいろいろある。毎週の礼拝において、聖書からのすばらしいメッセージを聴いているだろう。教会で行われる聖書研究会や祈り会で、深く聖書を学んでいる方も多い。キリスト者の仲間と、ディスカッション形式で聖書を学ぶと、他の人の考えや信仰にふれ、聖書の豊かさを実感できる。自分一人で聖書研究の時をもてる人は幸いだ。時間をかけて、一つの書物を通読したり、教理やあるテーマについて聖書が説き明かしていることを聖書全体から学ぶことは、とてもすばらしい。

しかし、聖書の最もすばらしい読み方は、デボーションにおいて、聖霊の導きをいただきながら読むことにある。この講演を終わるに当たり、このことを確認していただきたいと思う。

私は高校 1 年の時にクリスチャンになった。その頃、高校生伝道（Hi-BA）のスタッフから、「no Bible no breakfast（聖書を読まずして朝食を取るなかれ、の意）」という言葉を聞いた。それ以来、毎朝目が覚めたら直ぐ聖書を開く習慣が身についた。大学時代には、KGK（キリスト者学生会）の主事から、「静思の時」の持ち方を教えていただいた。このデボーションが、私の信仰の歩みの原点になっている。

朝の目覚めの瞬間は、一日のスタートで、最もすばらしい時である。私は、このような習慣を身につけさせてくださった神に、今でも心から感謝している。だが、本当のことを言うと、デボーションの必要性を実感するようになったのは、被造物管理の神学に生きるようになってからである。この神学にパラダイムシフトしたとき、デボーションなしのキリスト者生活など、あり得ないことが分かった。「キリストとの共同相続人」（ローマ 8:17）として、あるいは「王であり、祭司」として歩むとは、どのようにしたら具体的に実現できるのか。被造物管理の神学に圧倒されて以来、このことは私にとって最重要課題となった。もしその具体的な姿を提示できなければ、被造物管理の神学は、絵に描いた餅にすぎない。起こっては消え、起こっては消えていった、過去の流行の神学の一つで終わるだろう。否、その流行にも乗ることができず、何の話題にもならない一過性の神学ということになるだろう。

皆さんに、もう一度考えていただきたいことがある。キリスト者とは、この世界においていかなる位置に置かれているのか、ということを。

> しかし、あなたがたは、選ばれた種族、**王である祭司**、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。（Ⅰペテロ 2:9）
> イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、また、私たちを**王国とし**、ご自分の父である神のために**祭司として**くださった方である。（黙示録 1:5-6）
> あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を**王国とし、祭司と**されました。彼らは地上を治めるのです。（黙示録 5:9-10）

キリスト者とは、この世界の王なる支配者として仕え、神にとりなす祭司として立てられた。この職務こそ、被造物

管理の内実である。その責務を果たすためには、毎朝のデボーションが不可欠である。否、デボーションそのものが、最大の職務なのだ。被造物管理の神学は、デボーションの中で実現していくと言っても、過言ではない。

では、そのデボーション（devotion）とは何か。語源は「devote（ささげる）」で、神に自らをささげることである。キリスト者の間では、この言葉を「朝の祈りの時間」を指すものとして、特別な意味で使っている。被造物管理の責任を果たすためには、このデボーションに鍵がある。

ここで、私の毎朝のデボーションの方法を紹介させていただこう。以下の方法は、聖霊の導きをいただきながら、ごく自然にしていることに過ぎない。特別なものではない。これからも聖霊は、私にふさわしいものに変えてくださると信じている。

①朝目が覚めたらまず、神が新しい日を備えてくださったことを感謝する。神は今日も、私たちのために、新しい日を創造してくださったのだ。「この日は主が造られた」とか、「頌栄 539 番」などを自由に賛美する。

②次に、聖霊なる神が、今朝も聖書をとおして神の御心を教え、今日の歩みに必要な指示や励ましを与えてくださるように祈る。大抵は、主の祈りを加える。中でも、「御国を来たらせたまえ。御心が天になるごとく、地にもなさせたまえ」の部分には、力が入る。

③その日に読もうと決めた聖書箇所をゆっくり読む（大抵は一つのパラグラフ）。その箇所で、聖書記者が読者に何を伝えようと意図したのかを考えながら、一語一語ゆっくり読む。（聖書箇所は、10 年ほどかかって聖書全体を網羅するようにと考えている。しかし、レビ記などは拾い読みをした。聖書の各書物を順番に読んでいるわけではない。福音書から預言書に飛び、そこから箴言に、という具合である。今は黙示録を読んでいる。聖霊の導きを大切にし、あまり先まで決めないようにしている。

④聖霊の語りかけを求めながら祈りつつ、意味がよく分からないところは、二度、三度と繰り返して読んでいる。内に住みたもう聖霊なる神ご自身が、私にとっての教師である。読んだことの中で、一つの句でもよい。テーマでもよい。聖霊が語ってくださるまま、自分の信仰の歩みを振り返りながら、黙想の時をもつ。反省もあれば、悔い改めもある。感謝もあれば、献身もある。神との自由な交わりの、楽しい時である。

⑤その後、一日のスケジュールのために祈る。お会いする予定の人のため、果たさなければならない仕事を思いつくまま自由に祈る。気になっていることや、思い出したこともそのまま神の前にもち出す。祈りの中で、自分の責任範囲を超えているとか、もう少しようすを見てからにしようなどと、自分の言動が変えられてしまうことが多くある。神との協働管理をしているという実感に満たされることが多い。

⑥自分が牧会に関わっているグループのメンバーのために祈る。誰のために祈るかは、聖霊の導きを仰ぎながら、自然に任せている。以前は、祈りのリストを使って順番に祈っていた。だが最近は、聖霊に導かれるままを大切にしている。結果として、沈黙の時間が多くなり、御霊の働きを感じることが多くなる。

⑦最後に、思い出した御言葉を告白する。マタイの福音書 28 章 18 節、ローマ人への手紙 8 章 28 節、コリント人への手紙第一 10 章 31 節、テサロニケ人への手紙第一 5 章 15-17 節、箴言 3 章 5-6 節などが多い。しかし、聖霊が思いもかけないみ言葉を思い出させてくださる。そういう経験には、神の導きを感じる。

大事なことは形ではない。形は必要だが、とらわれることはない。皆さんも、ご自分の状況に合わせ、いろいろ試行錯誤しながら、ご自分に合ったやり方を見出していくとよい。

一年 365 日は、当たり前のこととして存在するわけではない。神は、今日という新しい日を、一日一日と備えてくださっているのだ。確かにそれは、自然界の法則によって生じている。だが、その背後に神の御意思があるので、その法則も存在する。この新しい日も、神は王として全世界を治めておられる。しかもその統治のみわざに、我々キリスト者を共同統治者として招いてくださった。キリスト者は、まさに、「王」であり、「祭司」なのだ。その神からの職務を、朝のデボーションのときに確認する。そして、新たに聖霊に満たされ、この世界に自分の務めを果たすために派遣される。

復活されたイエスは、次のような言葉を弟子たちに語られた。今日のキリスト者にも、同じ言葉を毎朝語りかけ、私たちを世に派遣しているのではないだろうか。

「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。」そして、こう言われると、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。」（ヨハネ 20:20-21）

アーメン